

国ヶ崎遺跡

2020年7月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

国ヶ峰遺跡

2020年7月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会



国ヶ峠遺跡遠景（南から）



国ヶ峠遺跡遠景（北から）



調査区全景（俯瞰）



SX1 調査前（東から）

序

一般国道9号の浜田市三隅町～益田市遠田町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局浜田河川国道事務所では山陰自動車道の一部である三隅・益田道路を事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は令和元年度に実施した益田市西平原町、木部町地内に所在する国ヶ崎遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

国ヶ崎遺跡は中世の道路跡、石積遺構を確認し、当時の益田地域に居住した人々の交通の歴史を解明する資料が得られました。本報告書がこの地域の歴史を解明する基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力をいただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

令和2年7月

国土交通省中国地方整備局

浜田河川国道事務所長 前田 文雄

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、令和元年度に実施した一般国道9号(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

発掘調査を行った国ヶ崎遺跡は中世から近世にかけての道路跡、石積遺構を確認し、当時の益田地域に居住した人々の信仰と交通の歴史を解明する資料が得られました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめとする諸機関、多くの地元の方々にご協力をいただきました。関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和2年7月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が令和元年度に実施した一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

国ヶ崎遺跡 島根県益田市木部町イ1835外 824m²

3. 調査組織

調査主体 島根県教育委員会

令和元年度（本発掘調査・報告書作成）

〔事務局〕 文化財課 萩 雅人（課長）、池淵俊一（管理指導S調整監）、桑谷昭年（文化財G GL）

埋蔵文化財調査センター 植 真治（所長）、角田徳幸（高速道路調査推進S調整監）、

和田 諭（総務課長）、守岡正司（管理課長）、宮本正保（調査第二課長）

〔調査担当者〕 久保田一郎（同課企画員）、柳浦俊一（嘱託職員）、飯塚由起（調査補助員）

令和2年度（報告書編集）

〔事務局〕 文化財課 萩 雅人（課長）、池淵俊一（管理指導S調整監）、田中明子（文化財G GL）

埋蔵文化財調査センター 植 真治（所長）、角田徳幸（高速道路調査推進S調整監）、

和田 諭（総務課長）、守岡正司（管理課長）、林 健亮（調査第一課長）

〔調査担当者〕 東森 晋（同課調査第二係長）、福田市子（調査補助員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、次の機関に再委託した。

令和元年度：大畑建設株式会社（益田市大谷町）

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順・肩書きは当時）

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（島根県立三瓶自然館調整幹）

6. 掃図中の方位北は、測量法に基づく平面直角第III座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。

7. 本書で使用した第2・5・30図は国土地理院の1/25,000地図（益田、仙道郷、三隅）を使用して作成したものである。

8. 本書に記載する土層は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に従って記述した。

9. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は久保田が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、埋蔵文化財調査センター職員が行った。

10. 本書の執筆は久保田、柳浦が担当した。編集は東森、福田が担当した。

11. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用し、Adobe社のAdobe InDesignCC、Adobe IllustratorCC、Adobe PhotoshopCCを用いて作業を行った。

13. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。なお、掲載遺物のうち第15図5は、実測・写真撮影後に所有者に返却した。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 事業計画の概要	1
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整	1
3. 法的手続き	5
第2節 発掘作業と整理等作業の経過	5
1. 発掘作業	5
2. 整理等作業	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
1. 調査区の設定	11
2. 表土・包含層掘削と遺構の検出	11
3. 遺構掘削	12
4. 記録の作成	12
5. 整理作業	12
第2節 基本層序	12
第3節 検出遺構とその遺物	15
1. 祭祀関連遺構	15
2. 調査区東南部の遺構	23
3. その他の遺構	29
第4節 遺構外出土遺物	32
第4章 総括	35
第1節 石組（SX1）・石積遺構（SX2・4）について	35
第2節 道路遺構（SF1）について	36
第3節 石列（SX3）について	37

挿図目次

第1図 国ヶ崎遺跡の位置	1	第16図 SX2 実測図	21
第2図 事業予定地内の遺跡位置図	2	第17図 SX2 出土遺物実測図	23
第3図 調査区位置図	3	第18図 SX4 実測図	23
第4図 試掘確認調査トレント土層図	4	第19図 SX4 出土遺物実測図	23
第5図 国ヶ崎遺跡と周辺の遺跡	8	第20図 調査区東南部の遺構	24
第6図 調査前地形測量図	11	第21図 SX3 見通し図	25
第7図 遺構配置図・調査後地形測量図	13	第22図 谷部旧表土出土遺物	26
第8図 中央セクション土層図	14	第23図 SF1 及びピット平面図	27
第9図 南壁土層図	14	第24図 SK1～20・ピットセクション図	28
第10図 SX1 実測図	17	第25図 SX5 盛土・SD2 平面図	30
第11図 SX1 天井石検出状況実測図	18	第26図 SX5 盛土セクション図	30
第12図 SX1 堀形実測図	18	第27図 SD2 セクション図	30
第13図 SX1 床土層堆積状況	18	第28図 石切り場立面図	31
第14図 SX1 遺物出土状況図	19	第29図 遺構外出土遺物実測図	33
第15図 SX1 出土遺物実測図	20	第30図 石州街道と国ヶ崎遺跡周辺の道	37

表目次

第1表 土器観察表	34	第3表 石製品観察表	34
第2表 陶磁器観察表	34	第4表 金属製品観察表	34

本文図版目次

SX1 解体作業	5	SX2 調査風景	22
谷地形調査風景	6	調査区西側の遺構	29
田中義昭氏調査指導状況	6	石切り場切り出し跡	31
報告書作成状況	6	移転された石造地蔵菩薩立像	35

図版目次

- 卷頭図版 1 国ヶ崎遺跡遠景（南から）
国ヶ崎遺跡遠景（北から）
- 卷頭図版 2 調査区全景（俯瞰）
SX1 調査前（東から）
- 図版 1 1. 国ヶ崎遺跡遠景（北から）
2. 調査前近景（北東から）
- 図版 2 1. 調査後近景（北から）
2. 調査後谷地形・道路遺構（南から）
- 図版 3 1. 中央セクション（北から）
2. 南壁セクション（北から）
- 図版 4 1. 中央セクション東端部分（北から）
2. 中央セクション中央部分（北から）
3. 中央セクション SX1 東側部分（北から）
4. 中央セクション石切り場部分（北から）
- 図版 5 1. SX1 伐採後（東から）
2. SX1（東から）
- 図版 6 1. SX1 天井石検出状況（南から）
2. SX1 右側壁（東から）
- 図版 7 1. SX1 奥壁（東から）
2. SX1 床面東側（東から）
3. SX1 縦断セクション（東から）
4. SX1 地蔵台座（東から）
- 図版 8 1. SX1 小礫・遺物検出状況（北から）
2. SX1 小礫検出状況（南東から）
3. SX1 小礫断面（東から）
4. SX1 小礫除去後（東から）
- 図版 9 1. SX1 裏込め石（南東から）
2. SX1 床面セクション（東から）
3. SX1 完掘状況（西から）
- 図版 10 1. SX2 検出状況（南西から）
2. SX2 基底部（南から）
- 図版 11 1. SX2 東西セクション（北から）
2. SX2 南北セクション（西から）
3. SX2 完掘状況（西から）
- 図版 12 1. SX4 検出状況（南東から）
2. SX4 セクション（南西から）
- 図版 13 1. SX3（東から）
2. SX3（北から）
- 図版 14 1. SX3 東端（南から）
2. SX3 東端（北から）
- 図版 15 1. SF1 検出状況（西から）
2. SF1 完掘状況（西から）
- 図版 16 1. SF1 検出状況（南から）
2. SF1 セクション（北西から）
3. SF1 旧表土第21図2出土状況（北から）
4. SF1 テラス（北西から）
- 図版 17 SF1 完掘状況（西から）
- 図版 18 1. SX5（南から）
2. SX5 東端・SD2 東端（東から）
- 図版 19 1. SX5第24図 Aセクション（東から）
2. 石切り場（東から）
- 図版 20 1. 石切り場切り出し跡（東から）
2. 石切り場切り出し跡工具痕（東から）
- 図版 21 SX1 出土遺物
- 図版 22 1. SX2 出土遺物（外面）
2. SX2 出土遺物（内面）
- 図版 23 1. SX2 出土遺物
2. SX1 出土遺物
3. SX4 出土遺物
4. 谷部旧表土出土遺物
- 図版 24 谷部旧表土出土遺物
- 図版 25 遺構外出土遺物
- 図版 26 1. 遺構外出土遺物
2. 出土金属製品（X線写真）

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1. 事業計画の概要（第2図）

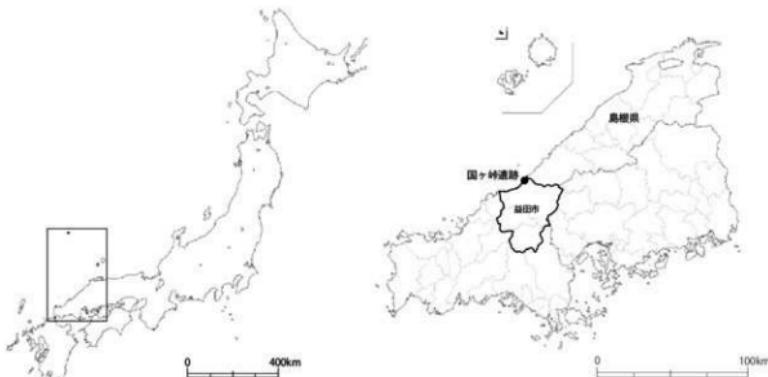
一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離755kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、島根県下でも例外ではない。海岸沿いを通る浜田市や益田市では急勾配でカーブが連続する区間が多く、交通渋滞や交通事故などが発生している。また緊急時の代替道路の確保が難しいのが現状である。

こうした状況を改善するため、国土交通省により三隅益田道路の事業化が図られ、平成23年10月30日に三隅益田道路として都市計画決定された。三隅益田道路は、浜田市三隅町森溝上の石見三隅インターチェンジを起点として、益田市遠田町の遠田インターチェンジまでを結ぶ延長15.2kmの自動車専用道路として、平成24年度に事業化され、平成27年度に工事着手している。

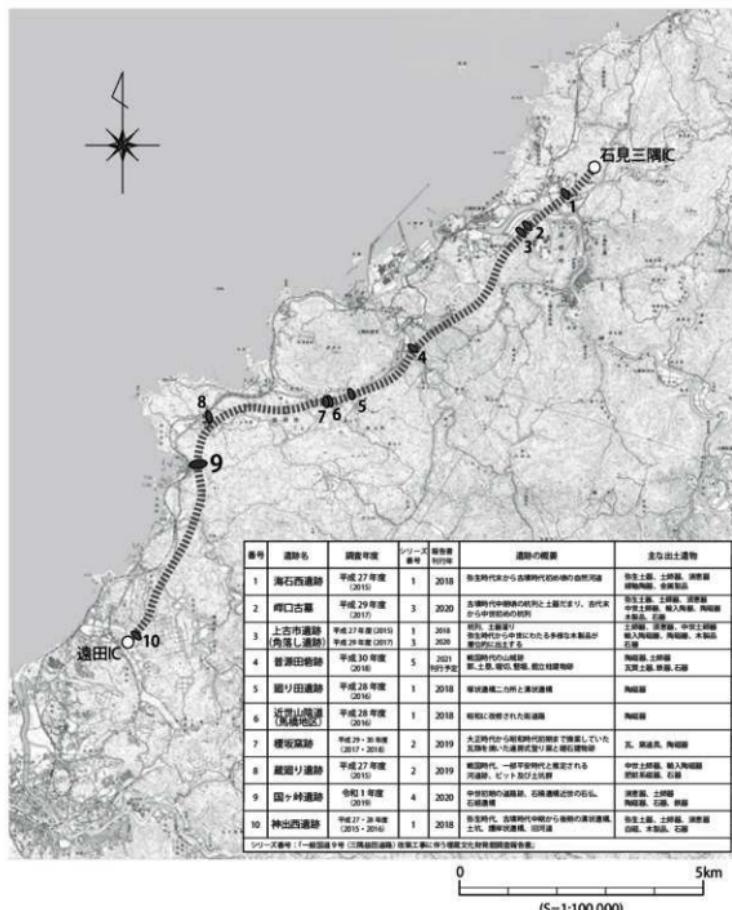
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整（第3・4図）

この計画・事業化にあたり、国土交通省から島根県教育委員会に対して、三隅益田道路建設予定地内遺跡の有無について照会があった。これを受けて島根県教委員会では、浜田市と益田市の両教育委員会の協力のもと、平成25年2月と平成26年2月～3月に分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡に加え、試掘調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘調査が必要な旨を平成26年5月13日付け島教文財第161号で回答した。その後も工事用道路の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会と国土交通省は地元教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成26・27年度から国庫補助事業により実施した。益田市西平原町～木部町に



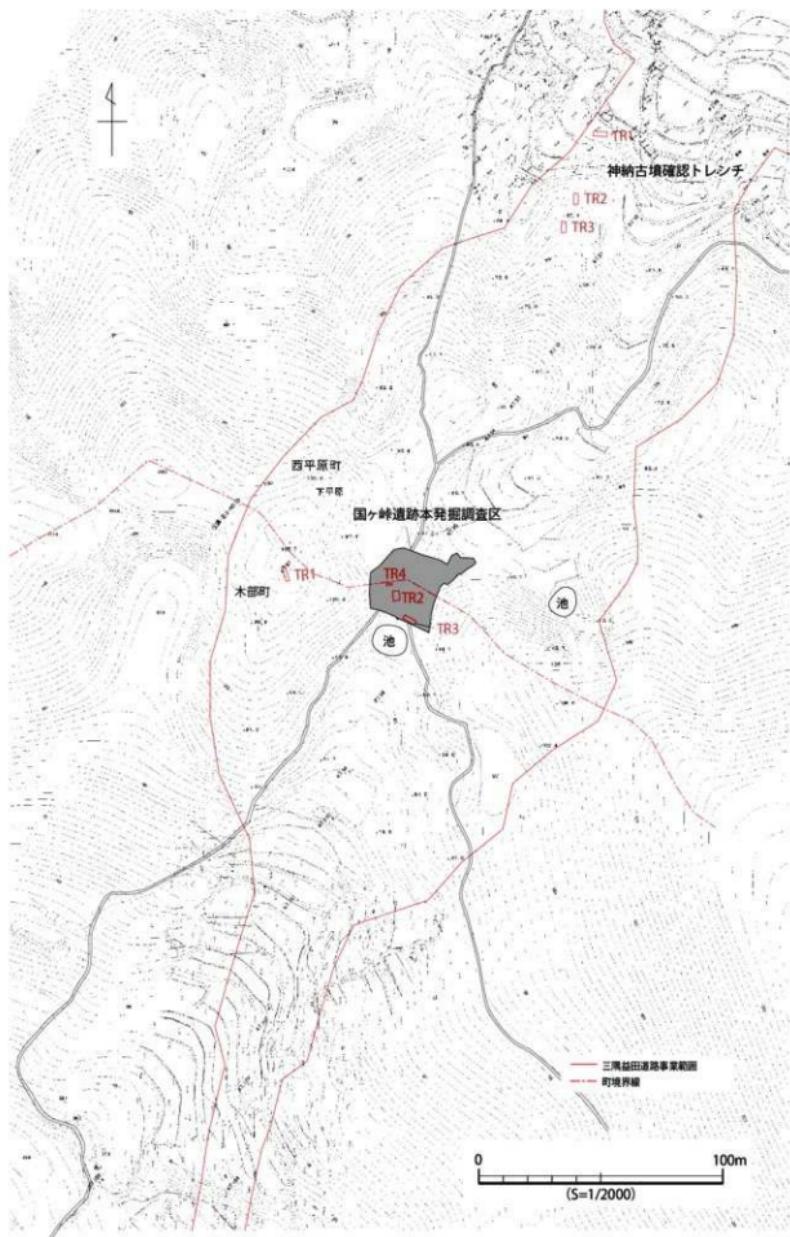
第1図 国ヶ岬遺跡の位置



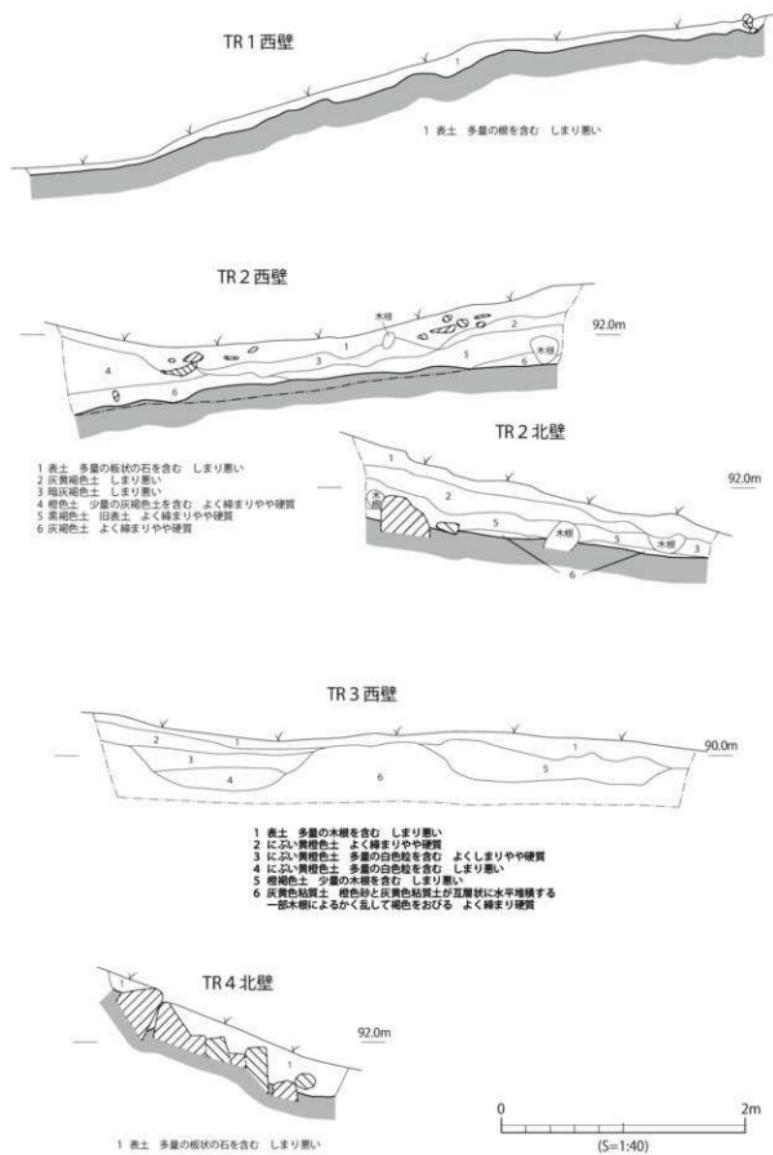
第2図 事業予定地内の遺跡位置図

かけての調査は平成27年度4月～6月に実施した。主要な課題は、詳しい位置が判らなくなつた神納古墳の確認と^①、分布調査で発見した国ヶ峰にある石造地蔵菩薩立像（以下地蔵と記述）が祀られている石室状の石組（SX1）が、古墳（横穴式石室）であるか否かの確認であった。神納古墳は、推定地にトレーンチを3ヶ所設定し調査を行つたが、古墳の位置は特定できなかつたため、本発掘調査は実施しなかつた。国ヶ峰遺跡は、石組の周辺には2ヶ所トレーンチを設定し調査を行つたが、周

(1) 昭和30年代に作成された島根県埋蔵文化財保蔵地調査カードに、すでに「墳形については今はさっぱり知れない。出土品から察すると翁ノ鼻古墳群の文化と共通点が認められる。」と記述されている。



第3図 調査区位置図



第4図 試掘確認調査トレントレンチ土層図

溝にあたる土層が確認できず、古墳時代の遺物も出土しなかったが、古墳の可能性が高いと判断し、本発掘調査の対象とした。このほか、石組南東の平坦部分に設定したTR3では、現里道下層に水平堆積の層を確認した。丘陵部に設定したTR1では遺構、遺物は確認されなかった。

以上の試掘調査結果を踏まえ、地蔵の祠となっている石組やTR3を含む岬の鞍部全体を本発掘調査対象とし、遺跡の名称を国ヶ岬遺跡とした。

3. 法的手手続き

国ヶ岬遺跡は平成27年9月8日付け国中整浜調設第87号で、文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対し島根県教育委員会は、平成27年9月8日付け島教文財第120号の40で記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。発掘調査は埋蔵文化財調査センターが行うこととなり、国土交通省と工事上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は、令和元年9月5日付け島教理第258号で、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出している。

現地調査終了後、遺跡の取り扱いは記録保存することとなり、令和2年1月23日付け島教文財第849号で島根県教育委員会教育長から浜田河川国道事務所長あて終了報告を提出した。

第2節 発掘作業と整理等作業の経過

1. 発掘作業

国ヶ岬遺跡の本発掘調査は、国道9号に面した戸廻り遺跡の発掘調査を終え、遺跡への進入路が確保できた後に着手することとし、調査時期を平成31年度に設定した。

現地調査は、令和元年10月1日、調査員1名、嘱託職員1名、調査補助員1名の1班で伐採前の地形測量から開始した。伐採は10月4日に終了し、10月8日～11日に追加の測量を行った。

10月15日に表土掘削を開始した。同時に石室状の石組であるSX1の現状での実測を行い、その後に床面の検出を試みた。調査は、記録を取りつつ、天井石を除去するなど隨時石組みを解体しながら行った。調査の途中で床面には小礫が敷き詰められていることがわかり、さらに調査を進めたところ、礫中から寛永通宝が出土したことから、SX1は近世に構築されたもので古墳ではないと判断した。SX1の調査は、構築時の掘形と裏込めを確認し、記録して終了した。

10月16日、調査区北東部では、表土掘削が進むと新たに石積遺構SX2が現れ経塚等の存在が予想された。SX2は調査区間に位置していたので、広がりを確認するために調査区を東へ拡張したが、それ以上に広がることはなかった。SX2の石の重なりを記録するため、3回に分けて平面実測を行った。基底部の石の実測を終えた後は、下部土坑の有無を確認するためサブトレンチを設定し発掘したが、地下施設は確認されなかった。



SX1解体作業

11月21日から調査区南部の調査を開始した。当初、地山面は浅いと思われたが、堆積土が予想以上に厚く、地表下約2mの深さで地山に達した。調査の結果、ここは本来谷地形で、地山によく似た土（橙色砂質土）が厚く堆積していたため、地表面が緩斜面となっていることがわかった。地山直上には黒色土層が堆積し、この層から若干の遺物が出土した。地山面では道路遺構とそれに関連すると思われるピット群が検出された。この間11月25日には元鳥根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏の調査指導を受けた。調査終盤にはほぼ地山面まで掘り下げが終わり、各遺構の実測、写真撮影を行った。さらに追加の測量を行った後、12月20日に空中撮影を行い、12月25日に現地調査を終了した。

調査終了後の令和2年2月8日には、地元鍾手公民館で調査成果報告会を開催し、3月6日には島根県立三瓶自然館の中村唯史氏にSX1、SX2、石切り場の石材について調査指導を受けた。

2. 整理等作業

整理作業のうち、遺物の洗浄、注記、接合は現地調査と並行して現場事務所で行った。令和2年1月以後は主として遺物実測と撮影、遺構図、写真図版の作成を行った。4月以降は調査員1名、嘱託職員1名、調査補助員2名、整理作業員2名で、執筆・報告書の編集作業を行った。全国的に感染の拡大した新型コロナウイルスの感染予防に努め、作業スペースの調整や在宅勤務を行いながら作業にあたった。



谷地形調査風景



田中義昭氏調査指導状況



報告書作成状況

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

国ヶ岬遺跡は益田市北部の西平原町・木部町大浜の境界に位置する。

益田市北部は、東側の山地から西の日本海へ向かって細長い丘陵が複数突出し、それらの丘陵に挟まれた盆地、平野部に土田、西平原、大浜等の集落が発達している。これらの丘陵が集落と集落を隔てる壁のような形となっており、集落間の移動を困難にしている。調査地の地名である国ヶ岬は西平原・大浜間の丘陵の鞍部に位置し、一般国道9号開通以前は両地区を直接結ぶ主要な交通路であった。明治22年の国道開通以後も、大浜地区から東福寺（西平原町）への参拝者や、山間に位置する集落「釜口」から鎌手小学校へ通学する学童がこの道を利用していた。昭和10年代の岬を知る人は「鬱蒼として、近づくのが怖かった」という⁽¹⁾。

開発時期は不明であるが、岬道が通る谷部でも、西平原、大浜の両方から開発が進んで調査区の直下まで水田化し、水源となる堤も築かれた。とりわけ大浜側は、西平原側に比べて湧水に乏しく、堤の役割は大きかった。調査区の南に接して堤の跡が残るが、すでに耕作は放棄され、杉林に代わっている。

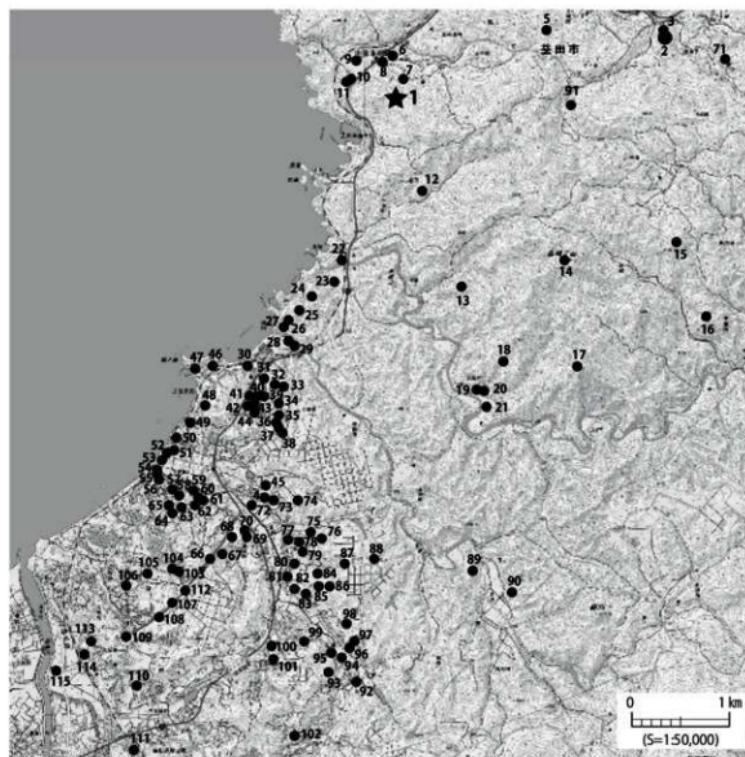
第2節 歴史的環境

平成13年度から平成21年度にかけて行われた益田道路地内の調査により、益田市東部の丘陵地帯で旧石器～縄文時代の状況が明らかになった。久城西II遺跡（112）・堂ノ上遺跡（113）では旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器が出土しており、この地域では人々の活動が1万年以上前まで遡ることが知られる。若葉台遺跡（108）では縄文時代中期の落とし穴が確認されている。益田平野北部の沖手遺跡（115）では縄文時代後期～晩期の丸木舟が出土し、益田平野南部でも三宅御土居跡・土井戸遺跡で縄文時代後期～晩期の遺物が出土している。この時期に「古益田湖」を背景に、縄文人の活動範囲が平野部に広がっていたことがうかがわれる。国ヶ岬遺跡の所在する鎌手地域では、鎌手公民館所蔵の考古資料の中に縄文土器が含まれており、この地域でも縄文時代から人間の活動が確認できる。また、蔵廻り遺跡（6）の発掘調査でも黒曜石製の石鎚が出土している。

弥生時代には、益田川河口に近い沖手遺跡で弥生時代中期の水路とみられる溝状遺構が確認されており、陸化した冲積地でしだいに水田開発が進む様子が明らかとなっている。段丘上では専光寺脇遺跡（114）において弥生時代中期後半頃とみられる方形貼石墓が確認されている。弥生時代後期には、益田道路地内の調査で集落跡が多数確認されており（原浜遺跡（66）、久城西I遺跡（107）、久城東遺跡（109）、堂ノ上遺跡）、益田平野東側の丘陵地帯が生活の場となったことが知られる。

古墳時代には、丘陵部に大元1号墳（86）、スクモ塚古墳（106）、小丸山古墳等、首長墓とみられる大規模古墳が構築される。大元古墳群（前期）は、遠田川沿いの比較的小規模な平野を視野に入れる位置にある。周囲には柳ヶ溢古墳群が分布し、小規模な古墳を築く有力者層の成長をうかが

(1) 調査指導者・田中義昭氏のご教示による。田中氏は昭和10年代に西平原町在住



1 国ヶ峠遺跡	24 城ヶ浦城跡	47 粟ノ鼻古墳群	70 大山遺跡	93 吉ヶ溢古墳
2 横坂窓跡	25 上の峠古墳	48 高芝遺跡	71 金山下鉢跡	94 三反田遺跡
3 近世山陰道路（馬橋地区）	26 峰山遺跡	49 佐々木窓跡	72 神出遺跡	95 三百田遺跡
4 神出西遺跡	27 寺ノ前古墳	50 前浜遺跡	73 宝珠庵溢遺跡	96 森ヶ内古墳
5 謙手丸山古墳	28 水雲島古墳	51 前浜古墳	74 獣城跡	97 石仏古墳
6 蔵廻り遺跡	29 水雲島遺跡	52 ウエ古墳	75 北ノ平経塚	98 原ヶ溢遺跡
7 神納古墳	30 大道古墳群	53 スケ入道遺跡	76 木原古墳	99 辻遺跡
8 佐々木窓跡	31 片子遺跡	54 原窓跡	77 北ヶ迫遺跡	100 地下田南遺跡
9 平原遺跡	32 片子東遺跡	55 木屋ヶ森古墳	78 神明北遺跡	101 地下田北遺跡
10 芝麻跡群	33 日々追遺跡	56 進徳遺跡	79 神明古墳	102 谷上古墳
11 中塚窓跡群	34 杉迫窓跡	57 前原遺跡	80 神明遺跡	103 尾堤古墳群
12 大石鉢跡	35 本片子東遺跡	58 原遺跡	81 平遺跡	104 吉ヶ溢古墳
13 滝の上鉢跡	36 本片子窓跡	59 森ノ上北遺跡	82 柳ヶ溢古墳	105 第2工場跡
14 烏帽子山城跡	37 朵ヶ迫窓跡	60 森ノ上東遺跡	83 貝崎古墳	106 スクモ塚古墳
15 宇治城跡	38 本片子南遺跡	61 寺田遺跡	84 薩ノ段遺跡	107 久城西I遺跡
16 高倉山城跡	39 本片子北遺跡	62 森ノ上西遺跡	85 煙籠ノ辻遺跡	108 若葉台遺跡
17 平家ヶ獄城跡	40 岩ヶ本遺跡	63 原南遺跡	86 大元古墳群	109 久城東遺跡
18 かんば鉢跡	41 西片子遺跡	64 原口東遺跡	87 木原溢奥遺跡	110 聖塚古墳
19 桂屋敷鉢跡	42 朵ヶ迫西遺跡	65 原口西遺跡	88 金堀古墳群	111 四ツ塚古墳群
20 赤雁土居跡	43 寺町遺跡	66 原口遺跡	89 大草城跡	112 久城西II遺跡
21 天道山城跡	44 朵ヶ迫東遺跡	67 流松南遺跡	90 大草古墳	113 常ノ上遺跡
22 木部郷古墳群	45 山城遺跡	68 流松遺跡	91 上の谷鉢跡	114 専光寺跡遺跡
23 井元遺跡	46 粟ノ鼻遺跡	69 高内古墳	92 杜山古墳	115 沖手遺跡

第5図 国ヶ峠遺跡と周辺の遺跡

わせる。四ツ塚古墳群（前期）、スクモ塚古墳（中期）、小丸山古墳（後期）は大元1号墳よりも西に位置し、益田平野全体を視野に入れる丘陵上にある。古墳時代後期には、益田平野に面した丘陵部に片山横穴墓群、三井裏横穴墓群、南長迫横穴墓群、北長迫横穴墓群が形成されるなど、益田平野を取り巻く地域で古墳の分布が密になっている。また、益田市北部の津田町にも鶴ノ鼻古墳群が出現し、豊富な副葬品が出土している。さらに、土田町中心部にも鎌手丸山古墳（5）が存在し、この地域で小規模な首長が成長しつつあったことがわかる。

益田市北部では古墳時代から奈良時代にかけての須恵器窯の分布が顕著である。鎌手地区では芝窯跡群（10）、中塚窯跡群（11）が知られている^②。南方の津田町で杉迫窯跡（34）・朵ヶ迫窯跡（37）、遠田町で本片子窯跡（36）が確認されている。本地域には良質な粘土を産出する「都野津層」が分布しており、須恵器の供給地となっていたことが想定される。

古代の集落は、益田市西部の日本海に面した丘陵上に位置する大溢遺跡、益田川東岸の丘陵上に位置する久城東遺跡で確認されている。平野南西部に位置する中小路遺跡では、径60～80cmの柱穴をもつ掘立柱建物が確認されており、奈良～平安時代の官衙跡と推定されている。また、内陸部の美都町に所在する酒屋原遺跡では、円面鏡が出土しており、奈良時代～平安時代の官衙跡と推定されている。

平安時代には益田荘、長野荘といった荘園が成立する。鎌倉時代以後は益田氏の拠点として発展しており、関連の遺跡が分布する。七尾城は益田氏が拠点とした山城で、益田平野東部の丘陵上に位置する。山麓には、益田氏が拠点とした居館である三宅御土居跡があり、川や堀、土壁によって周囲の防御を固めている。中国・朝鮮半島を相手とする貿易は、益田氏の主要な経済基盤の一つとなっているが、これに関連した港湾関連遺跡も高い密度で分布する。益田市街の北部に位置す中島町・中吉田町付近には大きく湾が入り込んでおり、海岸に突出する形で形成された砂丘の中須地区が船着き場となった。中須東原遺跡、中須西原遺跡はこの砂丘部に位置し、大量の貿易陶磁器が出土している。市街地中心部でも今市船着場跡が知られている。

国ヶ岬遺跡が所在する益田市北部から浜田市三隅町西部にかけては、鎌倉時代には「岡見郷」及び「納田郷」であり、益田氏と三隅氏の境界領域に位置している。16世紀前半段階では三隅氏の所領であったが、天文20～24（1551～1555）年に益田氏が攻略している。しかし、吉川氏との関係で知行できない状態であり^③、領有関係が複雑な地域であった。文禄・慶長の朝鮮侵攻に際し、益田氏の部下として輸送に参加した武士には遠田村、津田村、種村、木部村の武士が含まれており、本遺跡の周辺地域に小規模な領主層が存在していた状況が知られる。西平原町中心部に位置する藏廻り遺跡の発掘調査で、12～17世紀の遺物が少量ずつであるが出土している。貿易港を抱える益田中心部との交流が予想される。

一方で、当地では海上交通も活発であった。三隅を拠点とし、三隅氏や大内氏の下で所領や自由通行権を保障されつつ経済活動や、軍事行動に従事した大賀氏・三井氏などの海浜領主が知られている。益田市東部～浜田市西部の海浜部には、源田山城や城ヶ浦城（益田市津田町）等があり、海辺に位置する城館の密度が高く、海上交通の活発さを反映している可能性がある。

-
- (2) 町内で出土した須恵器が鎌手公民館に保存されている。資料見学に際して鎌手公民館から多大なご協力をいただいた。
- (3) 永禄13（1570）年2月9日付益田藤兼譲渡所領注文

江戸時代以降は、高津川を境に東部は浜田藩領、西部は津和野藩領となった。益田地区は、窯業に適した粘土を産する「都野津層」の分布圏に含まれており、この粘土を生かした窯業が発達した。益田市西部に位置する萩・石見空港の建設予定地内で発掘調査された仁右エ門山遺跡、相生遺跡では、江戸時代後期の窯場が確認された。仁右エ門山遺跡では、施釉赤瓦を主に生産しており、鬼瓦や鳥伏間、各種の屋根飾りを生産していた。発掘調査を実施したのは物原部分で、連房式登窯は現地保存されている。相生遺跡では、連房式登窯、工房跡と推定される礎石建物、水槽等、窯業関連の遺構が確認されている。国ヶ峰遺跡近隣では、三隅益田道路の建設予定地内の榎坂窯跡で、近代の施釉瓦工場の発掘調査が実施され、連棒式登窯と礎石建物が確認されている。当地域の陸上交通路は、浜田市三隅町岡見から南の益田市下種町方面へ向かう河谷と、源田山の南麓の土田一岡見間の地峡を経て西へ進む近世山陰道があった。

【参考文献】

- 島根県教育委員会 1992『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2002『増補改訂島根県遺跡図録II(石見編)』
島根県教育委員会 2007『沖手遺跡-1区の調査-』
島根県教育委員会 2010『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西I遺跡・久城西II遺跡・原浜遺跡』
島根県教育委員会 2018『海石西遺跡 角落し遺跡 遊り田遺跡 近世山陰道路(馬橋地区) 神山西遺跡』
島根県教育委員会 2019『蔵廻り遺跡 榎坂窯跡』
島根県古代文化センター 2015『島根県古代文化センター研究論集第15集』
島根県石見美術館 2017『企画展石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—』
瀬戸浩二・渡辺正巳 2015『第4節「古益田湖」の諸相』『日本海沿岸の潟湖における景觀と生業の研究』
田中義昭 1985『西平原窯址群』『島根県生業遺跡分布調査報告書III 窯業関係遺跡』島根県教育委員会
本多博之 2015『中世移行期西日本海地域の流通と海辺領主』『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』
島根県古代センター
益田市教育委員会 2000『中世今市船着場跡文化財調査報告書』
益田市教育委員会 2009『古代の益田を歩いてみよう』
益田市教育委員会 2009『中世の益田を歩いてみよう』
矢富熊一郎 1964『石西国道史』浜田国道工事事務所
矢富熊一郎 1966『諫手郷土史』島根県郷土史会

第3章 調査の方法と成果

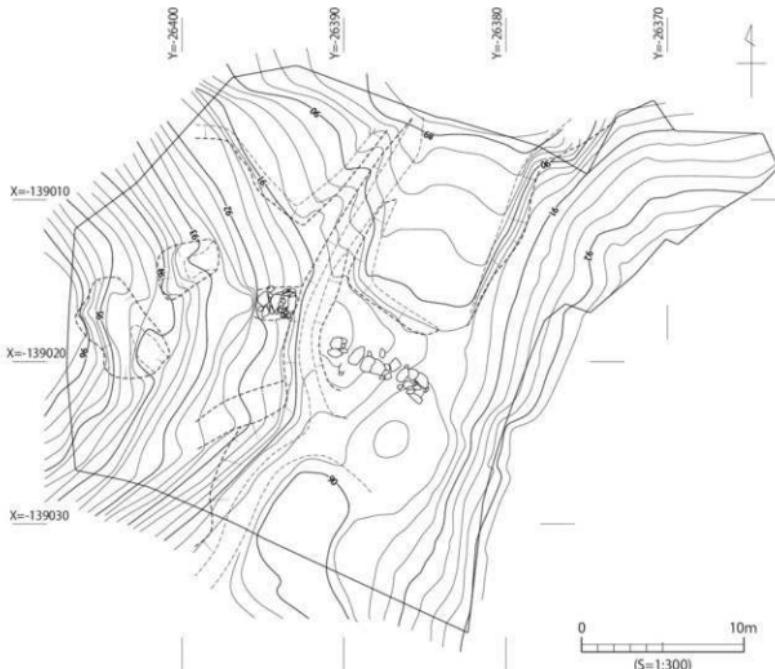
第1節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査対象は西平原町と木部町の境界となる丘陵の鞍部一帯で、両地区を結ぶ峠道が通る。調査対象範囲の面積は824m²である。座標系に基づくグリッドは設定せず、遺物は小片を除き遺跡調査システム「遺構くん」により取り上げを行った。

2. 表土・包含層掘削と遺構の検出

試掘調査の結果から、地表面から地山までの深度は浅いと予想されたため、重機による表土掘削は行わず、表土から地山まで人力により掘り下げた。表土・包含層の掘削時は主として鍬、スコップを使用し、遺構検出は草刈り・移植ごて等を使用した。排土は小車運搬により、調査区外2箇所に排出した。



第6図 調査前地形測量図

3. 遺構掘削

遺構の埋土掘削は、土層観察用のベルトを設定するか、半裁して埋土を掘削し、写真撮影後必要に応じて土層断面図を作成した。地蔵が安置されていたSX1については、現状で可能な範囲の実測図・セクション図を作成後、天井石を除去した。石が人力で動かし得る大きさでないため、石の搬出はクレーン仕様の重機によった。天井石除去後に補足を行った後、壁を構成する石を除去し、掘り方を実測した。石積遺構SX2については、複数回に分けて平面図を作成しながら、十字に畦を残して掘り下げ、地山まで掘り下がった段階で断面を撮影・実測し、畦を除去した。用いられている石が人頭大以下であるため、石は人力で除去し、小車で調査区外へ搬出した。

4. 記録の作成

遺構の平面図は、遺跡調査システムを用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてもオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に遺跡調査システムによる記録作成を行った。遺構等の写真撮影はデジタルカメラを使用し、重要な遺構等については、 6×7 版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）カメラによる撮影を行った。

5. 整理作業

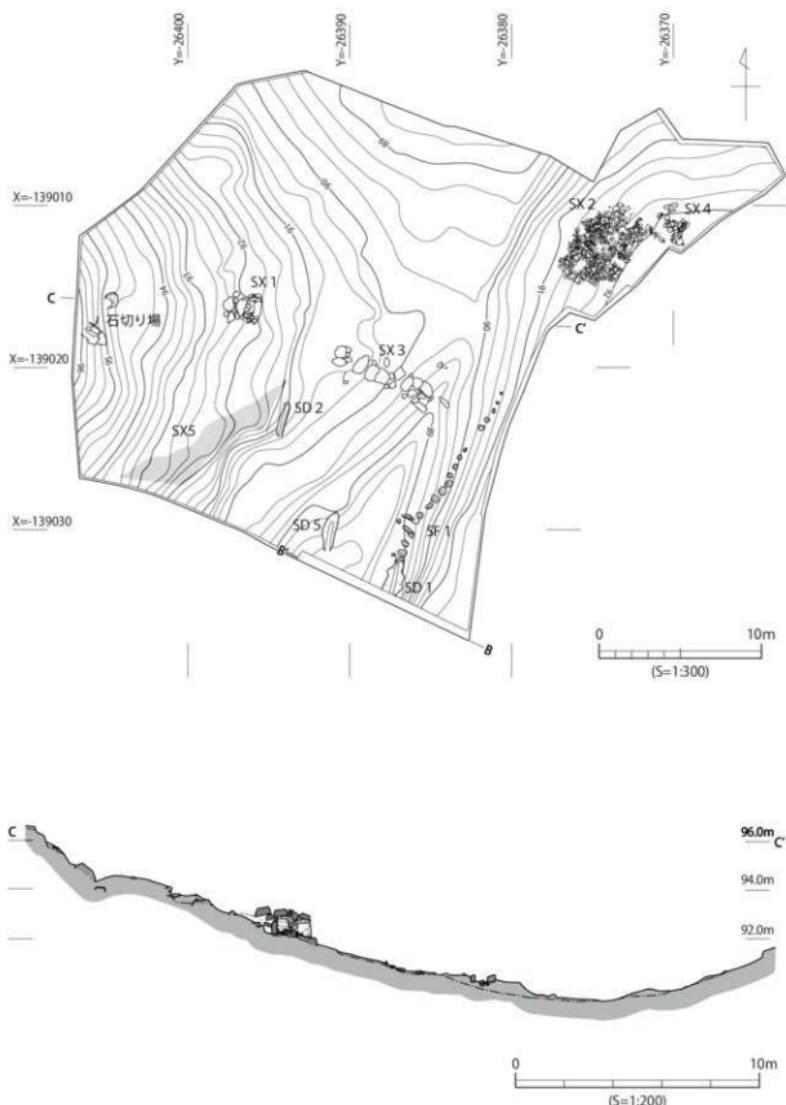
出土遺物は分類を行った後、実測する物を選び出し、実測、撮影した。報告書作成はDTP方式を採用し、遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工はAdobe社のIllustratorCC、PhotoshopCC、を用いた。写真是RAW撮影したデータを現像し、RGBデータからPhotoshopで色補正により白黒化して、階調、コントラストの調整を行い掲載した。最終的な原稿執筆、編集作業はIndesignCCを用いて行った。

第2節 基本層序

土層観察は、SX1主軸を通る中央セクション（第7図Cライン）と、SX2、谷を検出した調査区南壁のセクション（第7図Bライン）で行っている。

調査区中央では、上記の旧表土層がほとんど認められない。SX1前方では、上から順に表土、明黄褐色粘質土、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土、地山の順で堆積している。表土は18世紀から現代に至る遺物が混在する。明黄褐色粘質土はにぶい黄褐色土層の上を被覆する。一部でしか確認できること、地山ブロックを多量に含んでいることから、小規模な造成に伴う盛り土の可能性がある。にぶい黄褐色土は、18世紀を中心とする江戸時代の陶磁器のみを含む層である。近現代の遺物を含まない。地山は上位の土層とほぼ同色であるが、硬く締まり、マンガンを多量に含んでいることから他の層と区別が可能である。

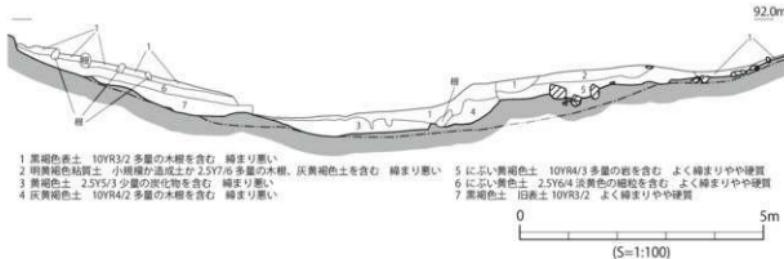
調査区東部のSX2付近は、上から表土、にぶい黄色土、黒褐色土（旧表土）、地山の順で堆積している。黒褐色土（旧表土）はSX2の石の隙間に侵入しており、SX2構築後に堆積したものである。上位の2層も同様である。含まれる遺物は奈良時代の須恵器で、主としてSX2の北のエリアから出土した。SX4を構成する石に引っかかって出土したものもあるが、SX4に直接伴う遺物ではなく、上方から流下してきたものであろう。調査区の他の箇所と異なり、SX2付近の表土には近世～



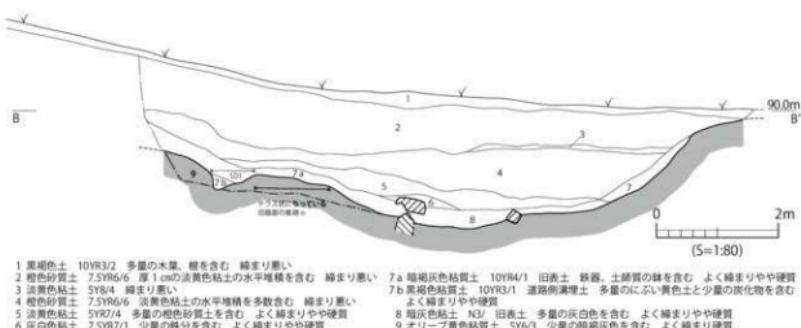
第7図 遺構配置図・調査後地形測量図

近現代の陶磁器等の遺物が含まれない。SX2廃絶後、ほとんど人の手が加わることも利用されることもないまま現在に至ったようである。

調査区南部では、厚さ1.6mの堆積層の下から遺物を含む旧表土層、道路遺構が検出された。上から表土、橙色砂質土、淡黄色粘土、灰白色粘土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、暗灰色粘土、地山の順で堆積している。表土は調査区中央と同じく近世～近現代の遺物を含む。橙色砂質土は全体の厚さ1.6mで、間に淡黄色粘土の薄い層が挟まる。旧地形は南側に開く細長い谷であるが、主としてこの橙色砂質土の厚い堆積により谷が埋没し、現状のなだらかな地形となっている。この橙色砂質土からは全く遺物が出土しなかったため、谷の埋没時期は不明である。暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、暗灰色粘土は地山の上に堆積した旧表土層である。旧表土からの出土遺物は土師質土器の鉢、須恵器、鉄器各1点のみであった。旧表土の堆積時期は、土師質土器の鉢から12～13世紀と考えられる。この層に被覆された道路遺構等の年代は、12～13世紀以前にしばられる。



第8図 中央セクション土層図



第9図 南壁土層図

第3節 検出遺構とその遺物

地蔵が安置された石組遺構SX1は里道から西へ2.6mの場所に位置するが、現里道を意識した立地であることは確かである。近年まで祭祀が行われていた。

調査区北東隅で検出された石積遺構SX2は、角礫や平たい石を不規則に積み上げて構築されている。構築された時期は中世初期である。下部に土坑や埋葬施設が検出されないこと、峠に位置することから才ノ神の可能性が考えられる。SX2付近で奈良時代の須恵器が複数出土したことから、調査区の北東部を拡張し、その拡張部分で検出されたのがSX4である。集石遺構であるが、隣接するSX2より小規模である。遺物が出土しなかったため時期は不明である。

調査区南部は、厚く堆積した土砂の下層で谷地形が確認され、谷に沿って東斜面を登っていく道路遺構(SF1)が確認された。時期は確定できないが、12～13世紀頃と思われる。この道路遺構は北へ行くほど残存状況が悪くなるが、方向はSX2へ向かうようである。

調査区中央では、峠を横切る石列SX3が確認された。石列は西半分の上層石列と東半分の下層石列からなる。谷の北端近くを横切るように下層石列が構築され、その後軸方向を踏襲してより大規模な上層石列が構築されたと考えられる。

調査区南西部では盛土により造成された帯状の平坦面SX5がある。SX5の東側は急斜面となっている。東端は現里道の法面に切られている。SD2は現里道の法面から検出された。道路遺構の一部と考えられ、里道が何度も付け替えられた様子がうかがえる。

調査区西部の丘陵斜面では石切り場跡が確認された。石の切り出しに使われた工具の痕跡等が見つかっている。

1. 祭祀関連遺構

SX1（第10～14図 図版5～9）

地蔵が安置され、地蔵堂として使用されていた石組遺構である。規模が小さく、当初から地蔵堂として構築されたと思われるが、江津市高野山古墳群など同規模の横穴式石室が存在すること、側壁の石材を2枚で構成するなど、地蔵堂としては手の込んだ作りをしていることから、横穴式石室を再利用した可能性も考えられた。

一方、横穴式石室として考えにくい要素としては、

- ①入口の、樋石に相当する石の上に側壁が載っている
- ②東半（入り口側）の床面が傾斜している

の2点であった。

ただし、①・②が古墳を地蔵堂として再利用した時期、あるいはそれ以降に東半部が補修・再構築された結果であって、西半分は横穴式石室の一部が残存している可能性も否定できなかったことから、古墳である可能性も考慮しつつ調査を行った。

石組の内法は奥行1.35m、幅0.6m、奥壁寄りで天井までの高さ0.5mを測り、開口方向はほぼ真東である。石組は側壁が片側各2枚、奥壁1枚で構成され、間隙にはやや小型の石を埋め込むように作られていた。いずれの石も平坦面が内側を向くように置かれていた。奥壁は側壁と直角に配置されず、北壁との交点が鈍角に、南壁との交点が鋭角に配置されている。

天井石は、大小の石が南北1.8m、東西2.4mの範囲に置かれていたが、基本的に大きな石6枚で構成される。これらは1.2m×0.6m前後を測り、長軸が石組の主軸に直交するように置かれていた。やはり平坦面を内側に向けるものが多いが、先尖の部分が内側を向いているものについては隙間を埋め込むためのものと考えられる。発掘前には小型の石が数個集められていたが、これらは不安定であったため原位置でないものと考えた。

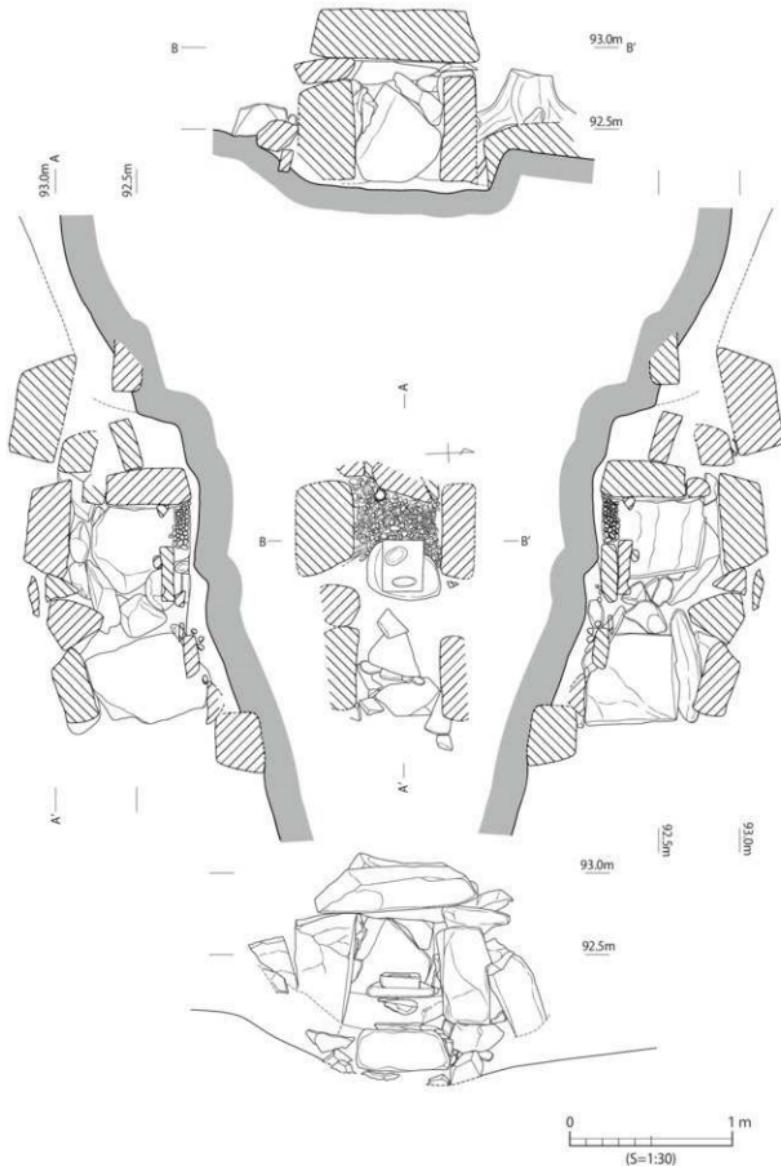
発掘前の床面は、入口から約0.7m入った付近から奥は比較的平坦、それより入口にかけては約15～20度で傾斜していた。傾斜変換点では方形に加工され水受けが設置された台座（第15図5）、さらにその下に45cm×30cmの楕円形をした平坦な河原礫が置かれていた。また、台座上には10cm大の河原礫が置かれていた。二次的に置かれたように思われたが、確認はない。

奥壁側の床面は、発掘前には西南隅から石組中央部に向かってやや傾斜していた。調査の結果この傾斜は西南隅からの流入土であることが判明し、本来平坦であったと考えられる。流入土を除去すると径1～3cmの大いな小礫が約10cmの厚さで敷き詰められていた。小礫中からは、燈明皿（第15図1）、肥前系花瓶（同図2）、寛永通宝（同図3）が出土した。小礫群が台座下に設置された河原礫を取り巻いて敷かれていたことから、河原礫は少なくとも小礫群が敷き詰められる時点で同時に置かれたものと考えられる。あるいはこの河原礫は、石組構築時に置かれた台座の可能性も考えられる。小礫と地山の間には褐色土が薄く堆積していた。掘形底面を平坦に整形したと考えられる。

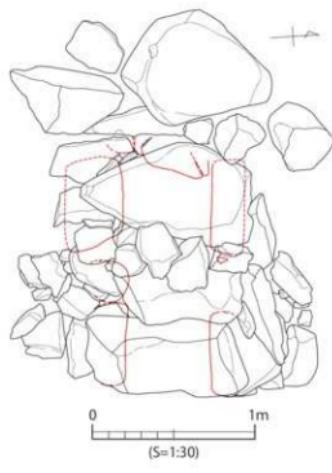
入り口から中央付近にかけての傾斜面では、調査前から階段状に置かれた平坦な石が数個みられ、このうち2枚の石が原位置と考えられた。入り口では框石状の大きな礫が置かれ、これを含めると3段のステップが認められた。これらの階段状の石は、供物用の祭壇であろうか。その間に小さな礫が詰め込まれており、階段状の石を安定させるためのものと考えられる。この部分では約10cmの厚さで灰黄褐色土が堆積していた。現地での観察ではこれは自然堆積土と考えられ、この部分では床面の整形・加工は行われていないと思われる。

側壁を除去したのちに、掘形を検出した。掘形の範囲は幅約1.4m、長さ約1.5mである。平面形は不整半円形を呈し、奥壁側を中心に掘削されたと考えられた。底面はわずかに凹面をなし、前述のように掘削後に土を入れて整形したと考えられる。底面では側壁や奥壁を設置するための掘り込みなどは確認できなかった。石組との間には大きな礫が入れられていた。これらに規則性はみられず、周囲にある石を無作為に投げ込んだような印象である。埋土は締まりが悪く、裏込めの土とは考えにくい。自然に流入した土と思われ、SX1構築時には石組と掘形の間は石が詰め込まれた状態であったと推測される。なお、奥壁側では天井石撤去の際に周囲の土が乱れてしまい、掘形上部の検出とその内部の土層観察を行うことができなかった。

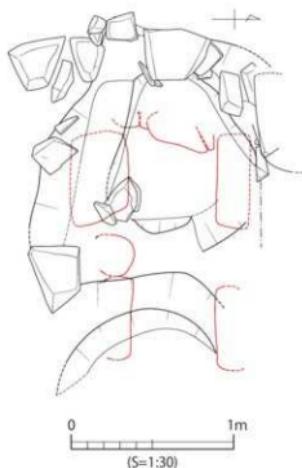
前述のように、床面の小礫内から灯明皿、肥前系花瓶、寛永通宝が出土している。寛永通宝がいわゆる「新寛永」で17世紀中葉以降、肥前系花瓶が18世紀中葉と考えられる。小礫が構築時のものであれば、SX1は18世紀中葉に作られたことになる。SX1前方の包含層出土遺物の年代は18世紀半ば以降に属するものが多く、祭祀が行われた時期は18世紀半ば以降と考えられる。



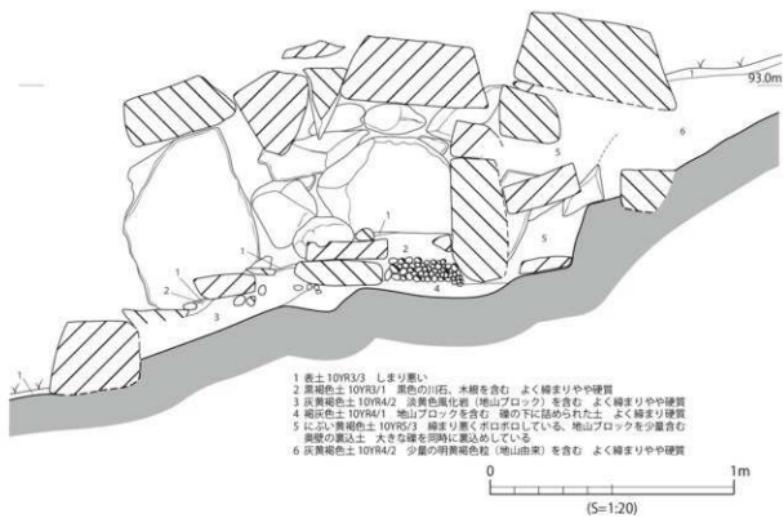
第10図 SX1実測図



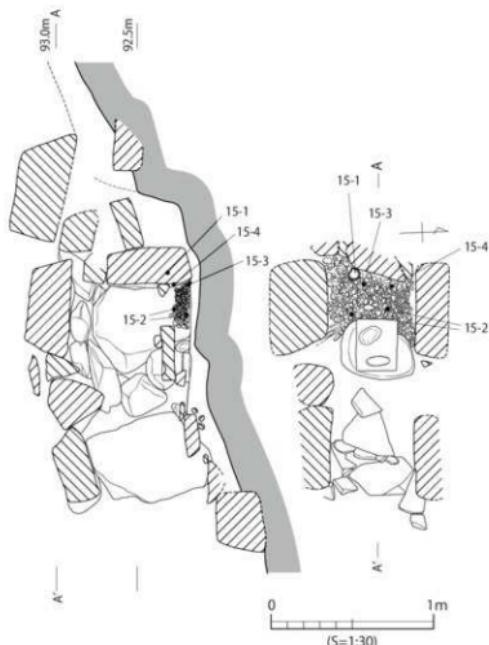
第11図 SX1天井石検出状況実測図



第12図 SX1掘形実測図



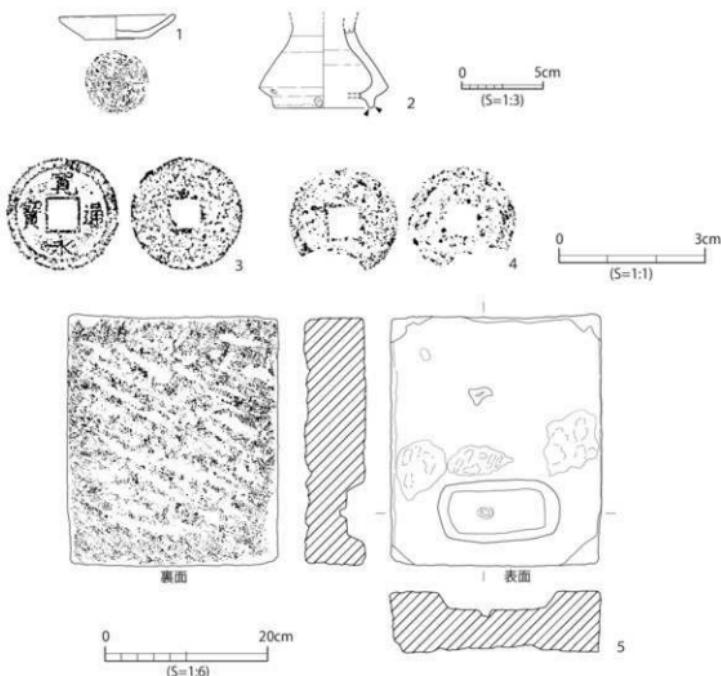
第13図 SX1床土層堆積状況



第14図 SX1遺物出土状況図

SX1出土遺物（第15図 図版21・23・26）

1は土師質土器の灯明皿である。地蔵を安置した台座と奥壁の間の空間から、正位で置かれた状態で出土した。硬質に焼成され、外面にススが付着する。底部外面は回転糸切り痕が残る。2は陶器の立鼓形の花瓶の高台部分である。底部付近が大きく外へ張り出す。底部中央は欠損している。外面は白化粧土による刷毛目が施される。肥前系で、年代は18世紀前葉～中葉である。3・4は小礫の層から出土した寛永通宝である。3は表面に「寛永通宝」の文字が明瞭に認められる。「寛」の最終二画は根元が離れている。裏面は平滑で、文様や文字がない。4は表面観察では文字が見えず、エックス線写真により「寛永通宝」の文字が判明した。裏面は無文。表面に褐色の錆が付着している。蛍光エックス線分析によると、この錆は銭貨自体から生じたものではなく、表面に付着した土砂に由来するものであり、寛永通宝自体は青銅製である。5は祠の中央に安置されていた、地蔵の台座である。手前には、長辺15cm、短辺7cm、深さ2cmの窪みが彫り出される。長辺は直線、短辺は緩い弧状である。窪みの中央に楕円形の孔が穿たれる。上面径1.0～1.5cm、底径7mm、深さ8mmを測る。底面は6～8mm窪み、工具痕跡が多数残る。

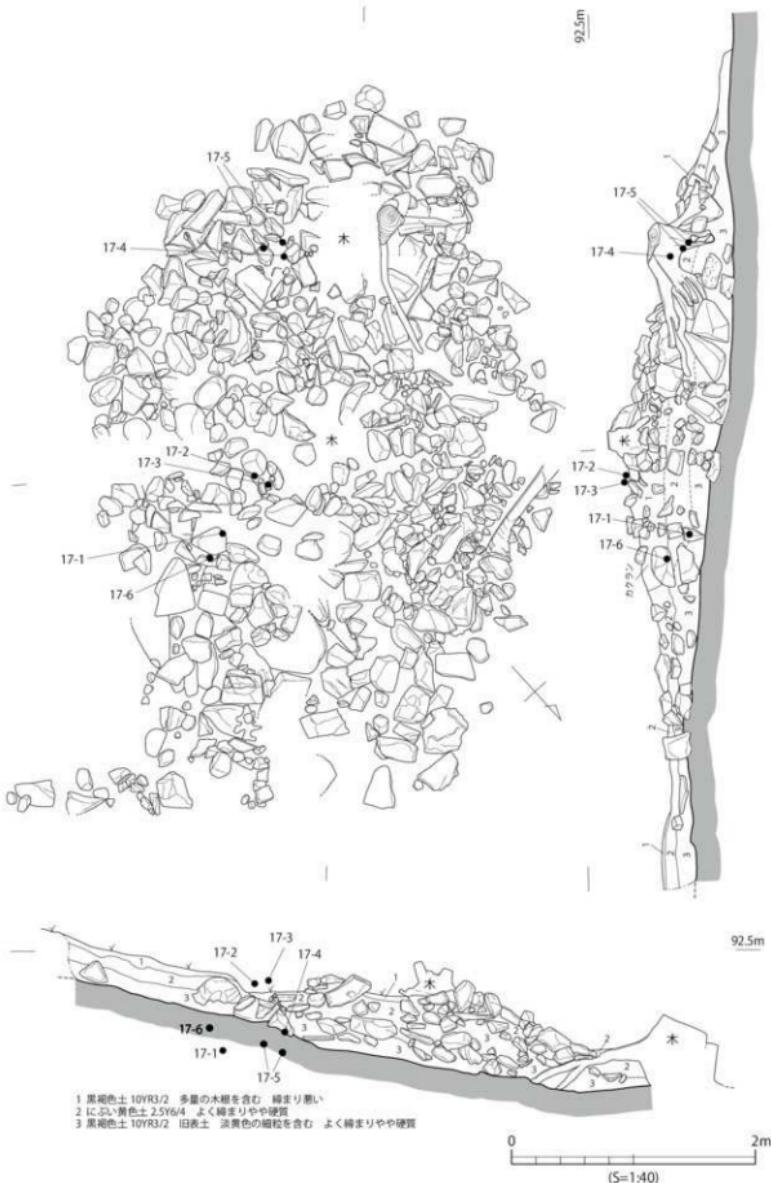


第15図 SX1出土遺物実測図

SX2（第16図、図版10・11）

本遺跡の調査は地蔵が祀られていたSX1を中心に調査区を設定したが、SX2はその北東隅に位置する。表土を除去したところ、石を積み上げて構築された遺構が確認され、調査範囲を東へ拡張した。石積みの範囲は平面椭円形で、規模は長径約6m、短径約3m、高さ80cmを測る。SX2付近の地形は、南東から北西へ傾斜しており、長軸は等高線に沿う北東—南西方向、短軸線は等高線に直交する北西—南東方向である。使われている石の多くは角が取れ、風化した自然礫で、一辺30cm～40cmを測る大型の石、一辺10cm前後の小型の石に分かれる。

遺構の最下部は、長辺2.4m×短辺1.8mの範囲に、一辺30cm～40cmを測る大型の石を、平たい面を下に向けた状態で置き、その上に、大小さまざまの礫を積み上げて構築していた。石積みの上層は、用いられている石にも積み方にも規則性が認められない。石積みの最下部は、底面が平たい石を多用し、平面形が四角になるよう意識して配列するなど、若干規則性が認められるが、明瞭に一定の範囲を画する基壇状の施設は確認できなかった。また、石積みの下部は地山のみで、土坑等の地下構造は確認されなかった。



第16図 SX2実測図

SX2付近の堆積土は、上から順に黒褐色表土、にぶい黄色土、黒褐色土（旧表土）である。旧表土は積み石の空隙に進入しているので、積み石遺構構築後に旧表土が堆積したとみられる。土師質土器碗、須恵器壺、陶器の底部等が出土しており、陶器・土師質土器から推定される構築年代は平安時代後期である。調査区のほかの部分と異なり江戸時代～現代の遺物が全く出土しないことから、平安時代以後は祭祀が途絶したと考えられる。

SX2出土遺物（第17図、図版22・23）

1は須恵器の壺の肩部から体部にかけての破片である。中位ではわずかに厚みを増す。2、3は釉薬はなく一見土師質土器のようであるが、胎土が硬質であることから、陶器の可能性がある。表面の荒れが著しいことから、被熱している可能性もある。2は高台の付く碗の底部である。高台はわずかに外方へ開く。底部内面中央は渦巻き状に浅くくぼむようである。一部が赤橙色に変色している。3は高台付き碗である。胎土は浅黄橙色で、表面の汚れが著しい。高台より内側の底面はごく薄く作られ、外側の腰の部分はやや厚みがある。4は高台がつく土師質土器の碗である。体下部の立ち上がりは緩い。高台はやや先細る断面形をもち、粘土を貼り付けて作られる。5は高台付きの碗である。高台部は貼り付けにより作られる。外へ大きく開き、直線的に立ち上がる断面形である。3・4は掘削の初期、SX2検出直下のにぶい黄色土（第16図2層）から出土した。2・5・6は石積み下面の旧表土の層（第16図3層）から出土した。2～5の年代は中世初め頃とみられる。6は土師質土器の小型皿の底部と口縁部である。色調、胎土、大きさが共通しており同一個体の可能性が高いが、接合しない。底部は風化が進んでおり、切り離し痕跡等は確認できない。

SX4（第18図、図版12）

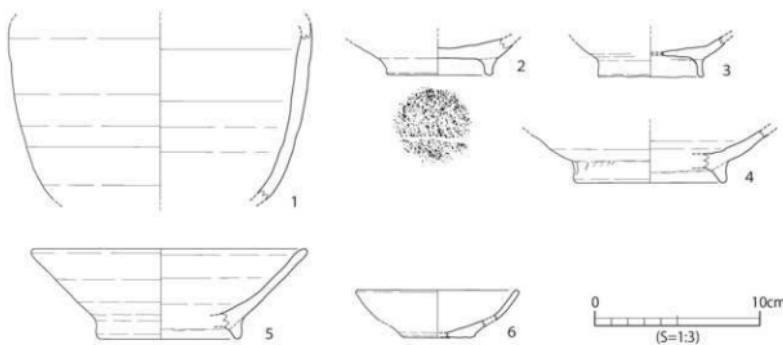
SX2付近の調査区間で須恵器が出土したため、調査区北東隅で調査範囲を拡張したところ、SX2とは別にもう1基の集石遺構が検出され、これをSX4とした。SX4は南北方向の長さ2.4m、東西方向1.0mの小規模な集石遺構である。角礫、平たい石が多く用いられ、平たい面が地山に接するように置かれている。集石の下部は地山面で、土坑等の地下施設は伴わない。石の間から、表面を研磨された球形の円礫1点が出土した。

SX4出土遺物（第19図、図版23）

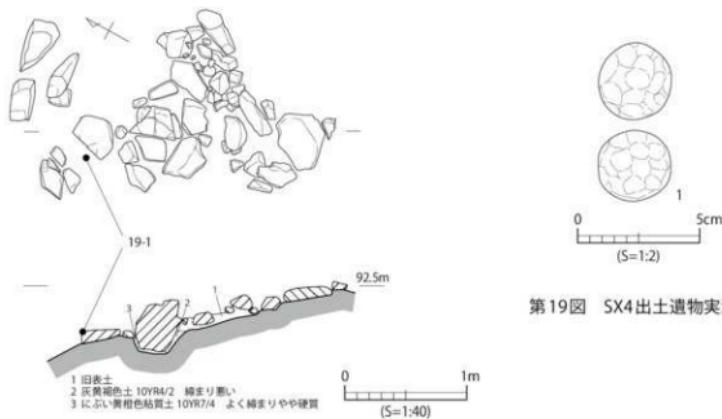
1は研磨され球形に整えられた石である。彩色、文字等はみられない。



SX2調査風景



第17図 SX2出土遺物実測図



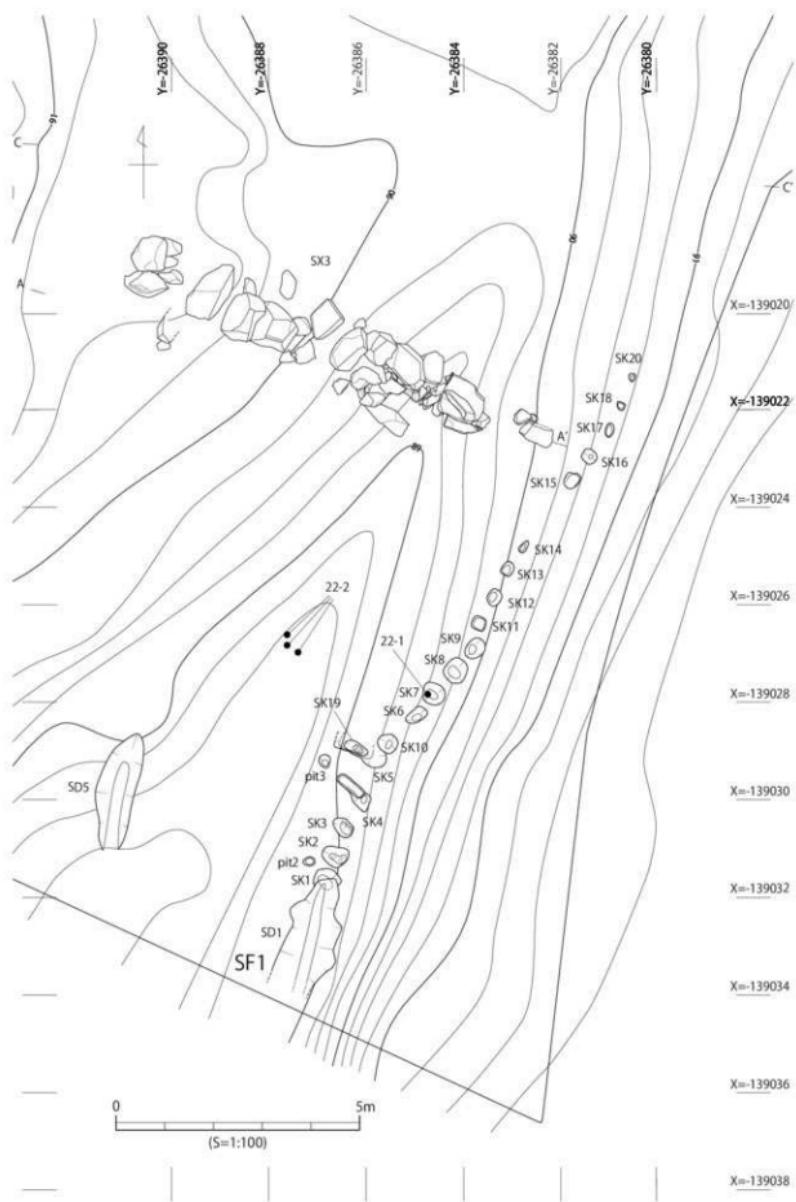
第18図 SX4実測図

第19図 SX4出土遺物実測図

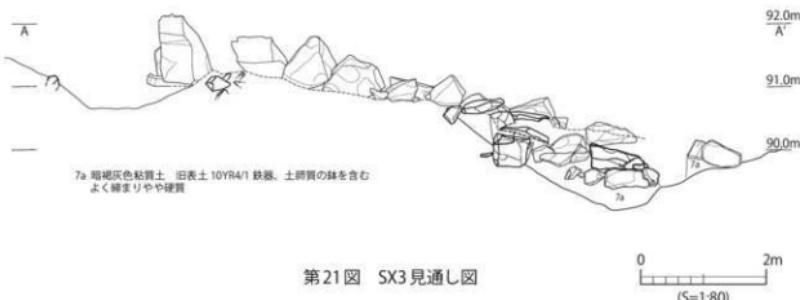
2. 調査区東南部の遺構（第20図）

調査区東南部は、丘陵鞍部から南に下る傾斜地である。鎌手集落からの里道が一方は大浜に、一方は大谷・釜口に至る里道の分岐点にあたる。鞍部付近には調査前から巨石列があたかも里道を遮断するかのように並んでいた（SX3）。これらの石は人為的に並べられたように思われたので、この部分も調査に加えた。

試掘調査では表土直下で地山らしい土が検出され、古い地形が現在に残ると思われた。しかし、今回の調査でこの土が周囲の地山より軟質であった為、さらに深く発掘して地山および遺構の有無を確認する必要が生じた。調査を進めると、当初、地山と認識した橙色砂質土（第9図2～5層）



第20図 調査区東南部の遺構



第21図 SX3 見通し図

の下から暗灰色～黒褐色を呈した粘質土が検出され、これが旧表土と考えられた。この結果、この地は本来谷地形で、上部の2～5層は後世の再堆積であることが判明した。この橙色砂質土は色調や土質から地山由来と思われるが、調査地周辺の状況から人為的な堆積とは考えにくい。がけ崩れなど、自然災害に起因する可能性が高いと思われた。

検出された谷は鞍部からやや南から始まり、南西に向かうにしたがって徐々に広がる馬蹄形を呈す。調査区南端では最も深いところで現地表下約1.2mで地山が検出された。谷底には礫が並んでいたが、いずれも加工がみられないこと、この山で産出する石材であることなどから、谷底に自然に集まつた礫群と判断した。

谷の東側では平坦面、溝状遺構（SD1）、土坑群が検出され、これらを道路遺構と考えSF1とした。谷の西側でも溝状遺構（SD5）が検出され、これも道路側溝と考えられた。これらの道路遺構が時期を異にするのか同時併存したのかについては、判断できなかった。なお、これらを被覆する旧表土から中世の土師質土器が出土していることから、構築時期は中世までさかのぼる可能性がある。

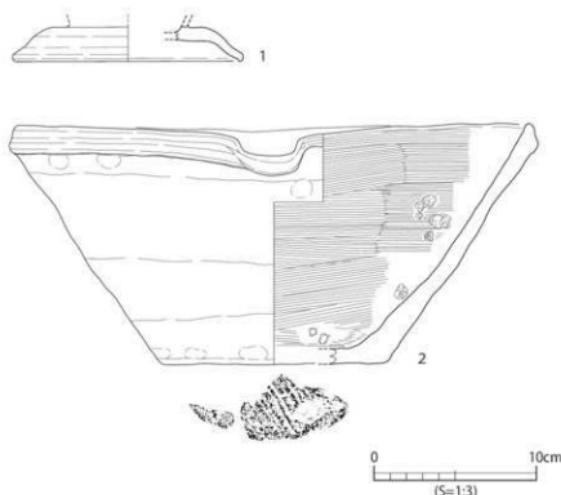
SX3（第20・21図 図版13・14）

東南部調査区で検出した谷の頂部に位置し、この谷を遮断するように配置された石列である。大半は調査前から地表面に露出していたが、東側ではほとんど埋没していた状況だった。石列の規模は長さ7.8mを測り、これに用いられた石は0.9～1.3mの巨石である。西側が高く、東に向かうにしたがって低くなるが、これは東部分が谷地形になり地表面が低くなっているためと思われる。調査を進めるに東端部で下部に2～3段の石が検出された。この部分の石は60～80cm大と、西側の石よりやや小型であった。谷底の部分では最下段の石が地山から約40cm浮いた状態で検出され、堆積がある程度進んだ時点で石列が設置されたことがわかる。

旧表土出土遺物（第22図、図版23・24）

調査区南部の谷底に堆積する旧表土層からは、須恵器と土師質の鉢各1点が出土したのみである。1は須恵器の壺蓋である。輪状つまみを有し、ツマミの先端は欠損する。天井部肩から斜め下方へ湾曲する断面形となる。口縁端部は下へ短く折り曲げ、外側に幅3mmのせまい面を作る。年代は奈良時代である。

2は土師質の鉢である。谷底中央の1か所に集中して、石の隙間に入り込むような状態で出土した。口縁部を下へ折って肥厚させ、外面側を強く横ナデすることにより、幅1.2cmの面を作る。口縁の1か所を外へ引き出して、片口状の注口を作る。基部の幅3.5cm、先端部の幅2.5cmである。内



第22図 谷部旧表土出土遺物

面全体に横方向の刷毛目が施される。底部外面には、製作途中で板の上に置いたときに生じたと考えられる木目が残る。在地産と考えられ、年代は12世紀～13世紀とみられる。

SF1 (第20・23・24図、図版15～17)

谷地形の東斜面から、北へのびる土坑列が検出された。土坑は合計20基を検出している。南側の7基はテラス東端の傾斜変換点に沿って検出された。SK6以北の土坑列は、北へ向うにしたがって谷の中央から東へ逸れていく。北側の土坑ほど径が小さく浅い。標高が高い位置にある北東部は遺存状況が悪いと考えられる。

土坑の平面形は円形のものが多いが、SK4とSK19 (SK5の下層で確認) のみ長楕円形である。断面形は深い溝状である。一部の土坑では、底面に径5～10cmの凹凸が顕著にみられるものがある。埋土はいずれも硬く締まった黄灰色粘土であり、場所によっては地山より硬い。黄灰色粘土の上層に黒褐色土が堆積する土坑もあるが、上面を被覆する旧表土が残存したものであろう。

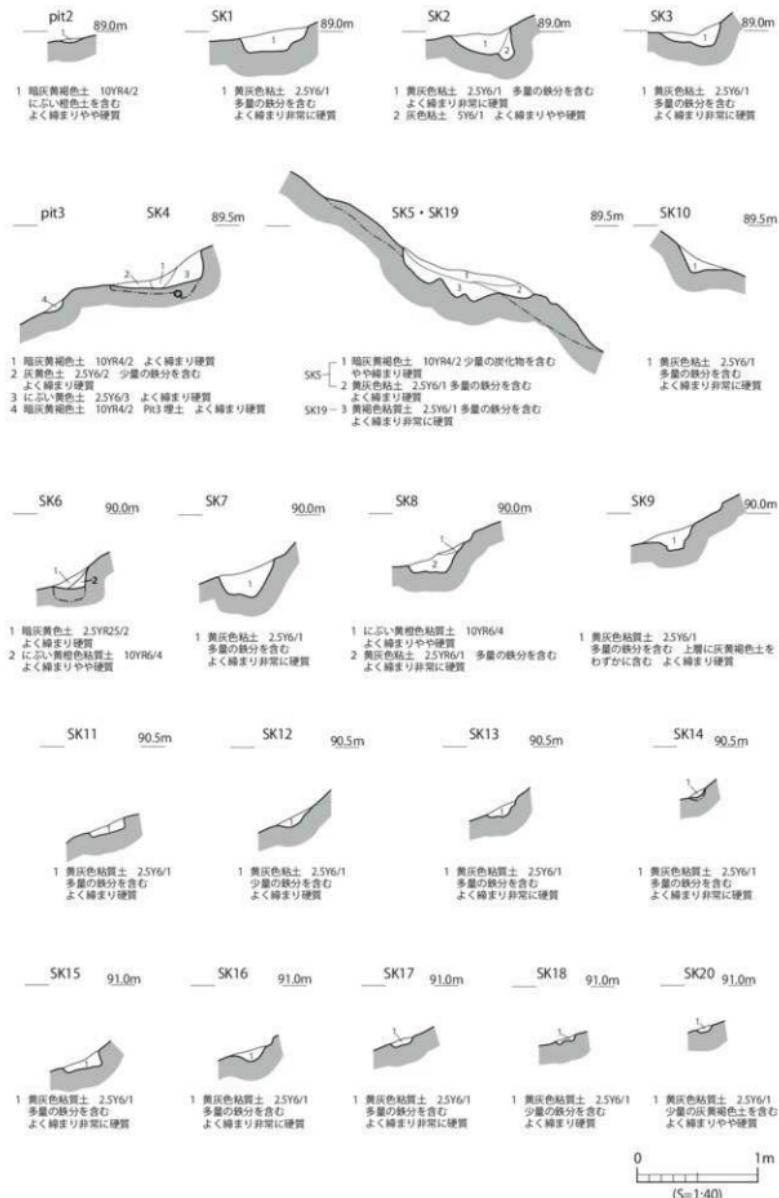
20基の土坑は列状に並び、埋土が共通することから、一連のものと考えられる。道路遺構の一部と考えられるが、松江市正源寺遺跡など一般的に道路遺構の土坑列は道路中央に配置されるのに対し、本遺跡では道路側溝の延長線上に配置されているという特徴がある。両者が同じ機能なのかどうかは不明である。硬化面が確認できなかったことから、失われている可能性がある。

土坑列及びSD1を被覆する旧表土からは、奈良時代の須恵器と12～13世紀の土師質の鉢が出土しているので、SD1と土坑列は12～13世紀以前に廃絶したと考えられる。

なお、南端のSK1はSD1と重複している。観察ではSD1がSK1を切っていると思われた。また、谷西斜面でも溝状遺構が検出された (SD5)。これも道路側溝と考えられるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。



第23図 SF1及びピット平面図



第24図 SK1～20・ピットセクション図

3. その他の遺構

SX5（第25・26図、図版21～23）

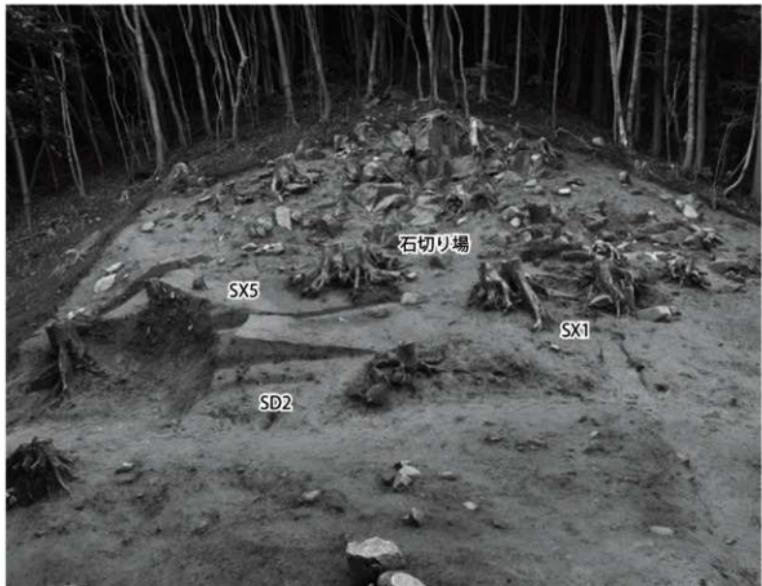
調査区南西部で確認された北東—南西方向にのびる帯状の平坦部である。掘削前の表面観察時は、幅約2mの平坦部が北東から南西へ帯状に続いており、現里道から山道が分岐して丘陵の南斜面を上がって西へ続くように見えた場所である。しかし、平坦部が確認できるのは里道から12mの範囲で、丘陵頂部に近づくに従い不明瞭となる。

平坦部の軸と直交する方向でサブトレンチを設定して調査したところ、地山と同系統の赤橙色土を旧表土層の上に盛って平坦面を造成していることが判明し、SX5とした。盛土の範囲は東西12m、南北幅1.0～1.4mを測り、東端は現里道の法面となっている。

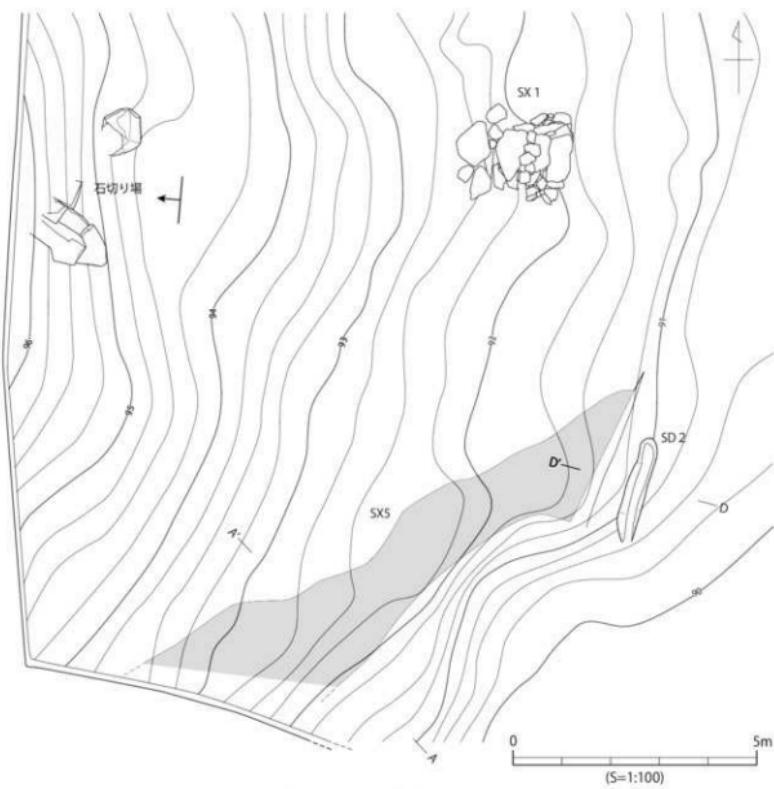
SX5からの出土遺物は無く、時期を確定できないが、東端を現里道に切られ、破壊されていることから、現里道より古い段階の遺構と判断できる。

SD2（第25・27図）

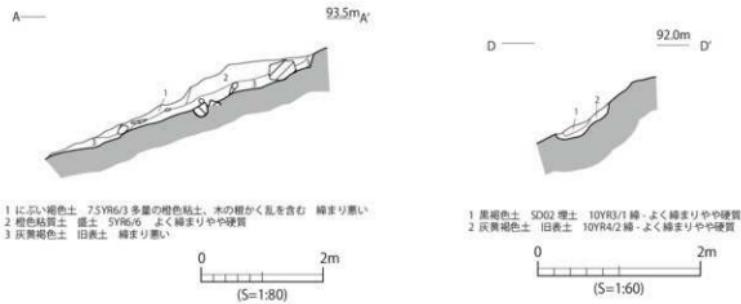
SX5東端の法面から検出されたのがSD2である。検出されたのは長さ2.2mの範囲であり、幅38cm、深さ10cmを測る。検出位置は現里道より90cm高かった。里道の西側に平行していること、覆土は黒褐色土で現里道と共に通することから、現道の前段階の道路側溝の可能性がある。



調査区西側の遺構

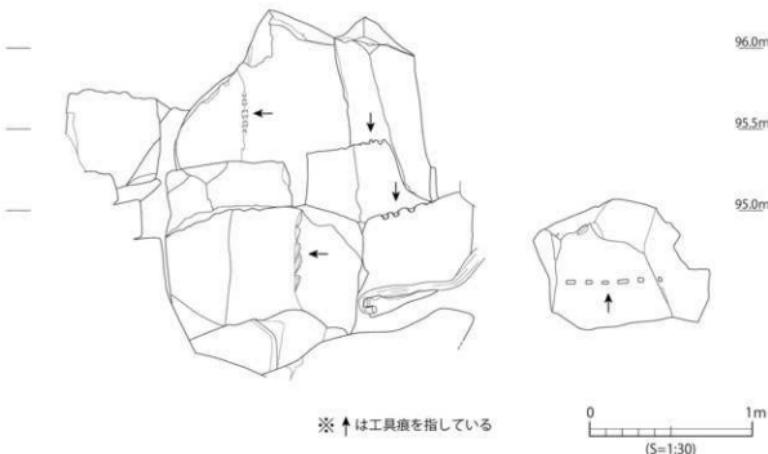


第25図 SX5盛土・SD2平面図



第26図 SX5盛土セクション図

第27図 SD2セクション図



第28図 石切り場立面図

石切り場跡（第28図、図版19～21）

調査区西部の斜面上で、石が四角く切り出された跡や、切り出し時の工具痕を確認した。昔の石切り場の跡と考えられるが、大規模に採集した様子はない。

調査前の時点では古墳の横穴式石室と予想していたSX1の上方に位置し、掘削前から地表面に多数の窪みが観察されたことから、古墳残れの可能性も考えられた。調査の結果、石切りに伴う工具の痕跡が複数確認され、石切り場跡と判明した。石切り作業には通常「矢」と呼ばれる工具を打ち込むが、打ち込んだだけで切り出しを中止した石も見られた。工具一つの大きさは厚さ2～2.5cm、幅4～6cmで、約7cmの間隔で打ち込まれていた。



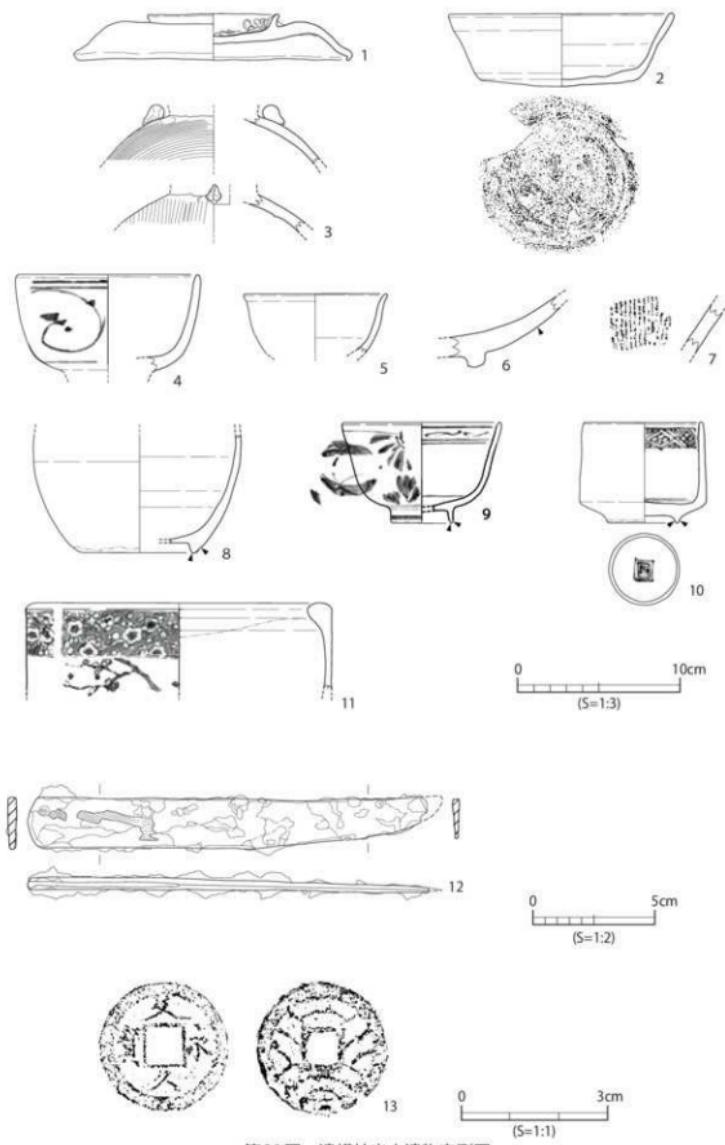
石切り場切り出し跡

第4節 遺構外出土遺物（第29図、図版28・29）

調査区北東部では、調査区際から須恵器の出土が続いたため、調査区を北へ拡張しており、1～3はこの拡張部分から出土した遺物である。

1は須恵器の环蓋である。天井部に輪状ツマミを有する。天井肩部から斜め下方へ湾曲する。口縁端部は下方やや内側へ短く折り曲げ、外側に幅3mmのわずかな面を作る。ツマミの内側には粘土塊多数が付着する。外面全体に自然釉がかかる。内面は、窯詰め焼成の時に重ね焼きされた状況を反映し、肩部を境に色調等が大きく異なる。口縁部は非常に焼成が良く、うすく自然釉がかかり黒光りしている。これに対し、天井部は通常の焼き上がりで灰色を呈している。色が異なる部分は口縁より5cm径が小さいことから、环の高台部が想定される。蓋を逆位にして天井部内面に环を正位に置くか、あるいはその逆に置くような重ね焼きの状況を推定することができる。2は須恵器の环身である。体部は斜め外方に直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切りされた後、ナデにより表面を整えられたものである。3は須恵器の提瓶である。ツマミの痕跡が付くことから、肩部の破片とみられる。外面全体に横方向のカキ目が施される。ツマミ直下の表面に爪痕状の痕跡があり、ツマミを貼り付けた際にいたと考えられる。

4は陶胎染付の碗である。腰が張り、体部、口縁部は直上へ延びる丸形碗である。内外面に多数の貫入が見られる。外面には草花文、團線が描かれる。5は陶器の端反碗である。内外面に灰釉を施し、表面は緑灰色をおびる。6は陶器の鉢の底部である。高台は削り出しにより成形、面取りされる。底部を除く外面と、内面に灰釉が施され、灰釉の垂れが外面に見られる。肥前系で、年代は17世紀後半である。7は擂鉢の破片である。内面には摺目が隙間なく施される。外面は削りである。堺、明石系か。年代は18世紀前半～中葉である。8は陶器の瓶である。底部は棒筒底である。外面は灰釉がかかり、白化粧土を用いた刷毛目を施す。高台内部にも施釉され、豊付は露胎。肥前系で、年代は18世紀前半～中葉である。9は磁器の碗である。端反形で、体部は斜め外方に立ち上がる。透明釉に呉須による染付で花鳥文を描く。肥前系で、年代は1820～1840年代である。10は磁器の筒形碗である。外面全体に青磁釉が施される。底部外面には染付で二重角「福」を描く。内面は染付により四方襷文および二重團線を描く。見込みは灰落ちのため、ほぼ全面暗灰色に変色している。11は磁器の筒形の火鉢である。口縁部は内側へ肥厚させた後、ナデで内向きの玉縁状に仕上げる。内面は口縁部を除き無釉。施釉部分と露胎部分の境界は赤橙色に変色する。外面には化学コバルトを用いた銅印判で梅花文を装飾する。年代は明治20年代後半以降である。有田系か。12は刀子である。先端の一部が欠損している。刃部は先端へ向かって徐々に先細る。基部側から6cmの範囲には、表面にわずかに木質が観察されることから、この部分は本来木製の柄に挿入した状態で使われたと考えられる。断面図からは、先端側のみ刃部を作り出していることがわかる。13は文久永宝である。表面には「文久永宝」の四文字を鋳出し、裏面は波文である。文久永宝は1863～1867年の間鑄造され、昭和初年まで流通していたとされる。



第29図 遺構外出土遺物実測図

第1表 土器観察表

調査番号	遺物番号	写真番号	出土位置	種別	断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調	胎土	焼成	調整	備考
15	1	21	SK1 黒褐色土	土師器	皿	6.9	3.8	1.5	外：にじい赤褐色 内：にじい褐色	砂 φ 0.5mm未満の 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎丸切り	無地、口縁の一部に自然剥がれる
17	1	22	SK2 黒褐色土 (田舎土)	須恵器	西				外：深褐色 内：褐色	砂 φ 1mm未満の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	
17	2	22	SK2 黒褐色土 (田舎土)	土師器	高台付碗	低窓			外：にじい深褐色 内：褐色	砂 φ 2mm以下の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎丸切り 内：田舎ナダ	
17	3	22	SK2 にじい黄色 土	土師器	高台付碗	低窓			外：にじい赤褐色 内：にじい褐色	砂 φ 1.5mm以下の砂 粘土含む	良好	外：本物 内：田舎丸切り	17-2・4・5とは胎土が異なる、質的に他成
17	4	22	SK2 にじい褐色 土	土師器	高台付碗	低窓			外：にじい深褐色 内：にじい褐色	砂 φ 1mm以下の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	
17	5	22	SK2 黒褐色土 (田舎土)	土師器	高台付碗	(16.0)	(8.0)	5.5	外：にじい深褐色 内：褐色	砂 φ 2mm未満の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	
17	6	23	SK2 黒褐色土 (田舎土)	土師器	皿	(10.0)	(4.0)		外：にじい褐色 内：浅褐色	砂 φ 4mm以下の砂 粘土含む	良好	外：不明 内：不明	
22	1	23	褐褐色土粘質土 (田舎土)	須恵器	坪壠	(14.0)			外：灰褐色 内：灰褐色	砂 φ 2mm以下の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	輪状ツマミ
22	2	24	褐褐色土粘質土 (田舎土)	土師器	坪壠	(14.0)	(13.0)	14.7	外：浅褐色 内：褐色	砂 φ 1mm以下の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	円口・輪状ツマミ
29	1	25	黑褐色土 (田舎土)	須恵器	盤	(6.0)			外：オーリーブ褐色 内：灰褐色	砂 φ 1mm以下(?)の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ・ナダ	輪状ツマミ内に施釉等付 裏面に墨ぬれ焼き底
29	2	25	にじい黄色土	須恵器	片身	(13.4)	9.5	4.5	外：黄褐色 内：灰褐色	砂 φ 1mm未満の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ・ナダ	
29	3	25	にじい黄色土	須恵器	深板				外：灰褐色 内：灰褐色	砂 φ 1mm以下(?)の砂 粘土含む	良好	外：田舎ナダ 内：田舎ナダ	

第2表 陶磁器観察表

調査番号	遺物番号	写真番号	出土位置	種別	断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	釉薬	文様	装飾	産地	年代・備考
15	2	23	SK1 表土	陶器	瓦瓶	(立腹形)		6.0	粗粒黃色	白化粧土 透明釉		刷毛目	肥前系	18世紀前半～中葉
29	4	26	表土	陶器	丸形瓶	(11.0)			粗粒黃色	透明釉 白化粧土	草花文・團扇	陶器染付	肥前系 見出	18世紀前半代
29	5	26	にじい黄褐色土	陶器	罐形圓形容器	(8.0)			灰黃褐色	細粒			在地系	19世紀代
29	6	26	褐色砂質土	陶器	鉢				灰褐色				肥前系	17世紀後半
29	7	26	表土	陶器	瓶				褐色				精・磨石風か	18世紀前半代～中葉
29	8	25	表土	陶器	瓶		7.0		にじい 黄褐色	白化粧土 透明釉		刷毛目	肥前系	18世紀前半～中葉 見出
29	9	25	表土	陶器	罐形圓形容器	(9.0)	3.8	6.2	灰褐色	透明釉 白化粧土	花鳥文・團扇	染付	肥前系	東大波 b ~ c1820 ~ 1840 年代
29	10	25	表土	陶器	筒形圓形容器	(7.0)	4.4	6.2	灰褐色	透明釉 白化粧土	四方開文 二重圓形容器		肥前系	東大波 a ～ b 相当 1750～1760 高台内鉢身二重角「福(音 L.)」
29	11	26	表土	陶器	六角 (圓形容器)	(17.0)			灰白色	透明釉 化学コバルト	梅花文	模印	有田系か	明治 20 年代後半～

第3表 石製品観察表

調査番号	遺物番号	写真番号	出土位置	種別	断面	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g/kg)	石材	色調	調整	備考
15	5	21	SK1	石製品	台座	30.7	25.9	7.5	10.5kg		灰白色	裏面工具痕あり	水受け部は 7.6cm × 15.0cm × 厚さ 2.2cm
19	1	23	SK4 にじい黄色土	石製品	不明	φ 3.2			192.05g		灰白色	磨き	全面に研磨している

第4表 金属製品観察表

調査番号	遺物番号	写真番号	出土位置	種別	断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	成形	備考	
15	3	21	SK1 玉印判内	金属製品	残片	2.4			0.1	2.63	青銅	铸造	「寛永通貫」
15	4	21	SK1 黒褐色土	金属製品	残片	2.3			0.1	1.83	青銅	铸造	「寛永通貫」
29	12	26	表土	金属製品	刀子	16.4	2.0	0.5	54.64	鉄	削切		
29	13	26	にじい黄褐色土	金属製品	残片	2.7			0.2	4.43	青銅	铸造	「文久永貫」

第4章 総括

発掘調査を行った地点は、近年まで西平原地区と木部地区を結ぶ生活道として利用されていた。発掘調査で中世の道路遺構が検出されたことにより、ここでの往来が中世から連綿と続いていたことが明らかになった。

また、地蔵を安置した石組（SX1）、石積遺構（SX2・4）は、SX2が中世前期、SX1が江戸時代中期であり、いずれも峠に関わる施設と考えられ、中世以来続く祭祀がうかがえる。

第1節 石組（SX1）・石積遺構（SX2・4）について

村落境界を祀る遺構は、松江市の布志名才の神遺跡などで発見されているがいずれも近世の遺構で、SX2のように中世初期までさかのぼる石積遺構は今のところ島根県内では確認されていない。しかし、岡山県新見市桑原遺跡では古代にさかのぼる道祖神遺構がある（岡山県教委1977）ことから、SX2も境界あるいは峠祭祀に関わる遺構である蓋然性は高い。この地が西平原村と木部村の村境であること、境界祭祀が行われていた可能性を考える傍証になろうか。遺物が出土しなかつたため時期は不詳だが、SX4もその可能性がある。

SX1は地蔵が安置された遺構で、18世紀中頃に作られたと考えられる。地蔵信仰も境界の祭祀と関わりが深いとされる（橋口2001）。SX1は「境界部を結界する装置」として作られ、地蔵がここに安置されたと理解したい。

以上のことから、SX2・SX4およびSX1は、この地で中世から近年にいたるまで継続した村落境界祭祀に関する遺構と考えることができる。

安置されていた地蔵は、現在国道9号に隣接した地蔵堂に移転・安置されており、全高45cm、地蔵本体の高さ40cmを測る。足、袈裟や台座の蓮華文は明瞭に残るが、頭部や肩など全体に上面の風化が進み、顔や手の指先の表現は不鮮明である。風化の度合いなどから、SX1構築当初から祀られていた可能性もある。紀年銘や寄進者銘は彫られていないため、いつ頃作られたものかは定かでないが、江戸時代から明治にかけての作と推定される⁽¹⁾。



移転された石造地蔵菩薩立像

(1) 古代出雲歴史博物館参与的野克之の指摘による。

現在各地に残る地蔵を安置した祠は、奥壁1枚、側壁各1枚、天井石1枚で構成するものが多いのに対し、SX1は数枚の石を組む手の込んだ作りである。地蔵は、構築当初には方形台座石直下の川原石に安置されたと推定される。河原石より奥は小河原礫を厚く敷き詰めて床面としており、これも通常の祠より丁寧さを感じさせる。台座石より前方は板状の石で階段状のステップが作られ、これは祭壇を思わせる。台座石から入口にかけては、前室的な意味合いがあったと思われる。

このようにSX1は念入りに作られているが、三方に壁（奥・側壁）を設け天井を架ける（天井石）、祭壇（前室）を設ける、といった属性は、各地に残る木造の地蔵堂と基本的に同じ構造といえる。他所のように木造で造られなかったのは、耐久性を考慮したのと石材がこの場所で確保できたためと考えられる。

木造か石造かの違いはともかく、村落境界の石仏には道標としての石仏とは違う意義があったのではないか。近畿地方をはじめ、日本では村境で行われる行事や習俗が多く、これは村の生活の場を悪霊や疫病から守るために行事で、村の生活を守るという意識は、戦国期から近世初期にかけて意識が成立したという（棚橋1986）。SX1の立地はまさに村境であり、住民にとっては村を防衛するための重要な精神的施設だったと思われる。

第2節 道路遺構（SF1）について

調査区東南部では、中世の道路遺構（SF1）ほか、道路に関係すると考えられる遺構が3か所で検出された。近世山陰道（石州街道）の記録（島根県教委1997）や国土地理院1/25,000の地図を参考にすると、益田市木部町から土田町に向かう石州街道には木部町釜口付近で分岐する北に向かう道が確認できる。この道は北上し西平原町に向かうが、峠近くで西に分岐し大浜地区に降りる道がさらに分岐している。聞き取りによると、高度成長期までは木部町や大浜地区からの学校への登校、遺跡の東北に位置する東福寺への参詣に利用されたという。国ヶ峠遺跡はまさにこの道の峠道で、調査前から道路の痕跡が各所にみられた。今回の調査では、道路遺構SF1が中世にさかのぼる可能性が高く、中世以来、近年に至るまで使用された道路であることが判明した。西平原町に所在する戦廻り遺跡では、11世紀後半～12世紀、16世紀の輸入陶磁器が出土し、中世集落の存在を知ることができる。今回の発掘調査により近隣集落との往来ルートの一つが明らかになったといえる。

SF1は道路側溝（SD01）や土坑列（SK1～20）を伴い、一部に路面に近い状態の平坦面が残っている。ほかに、SD05やSD01も道路側溝と考えられ、この部分に複数の道路跡が存在したと考えられる。これらは遺物が出土していないため時期が不明だが、幾度も道路が付け替えられて現在に至った可能性が高い。第22図2の資料から、ここで道路建設が行われたのは遅くとも中世初期であることはほぼ間違いないと思われる。あるいは同図1が示すように、奈良時代までさかのぼる可能性もある。いずれにしても、古来、この地が南北を繋ぐ重要な生活道路だったことがうかがえる。なお、前述したSX1ほかの峠・境界祭祀に関わる遺構が設置されたのも、道路に関係していると考えられる。



第30図 石州街道と国ヶ崎遺跡周辺の道

第3節 石列（SX3）について

SX3は、丘陵鞍部の峠道を横断するように、一列に石が並べられた状態を検出したものである。この遺構は、石を規則的に配置していることから、人為的なものと考えられるが、生活道として使われていた道の往来を阻害するように設置されているように見え、その設置意図が疑問となる。高さ約1mもある石列を乗り越えるのは困難が伴うものであり、また、それに使用されている石材も、少人数では運べない大きな石が多い。道の往来を妨げる施設は、それなりの公益と了解がなければ構築できないと思われることから、何らかの危機に際して設置された防御的施設の可能性を検討したい。

防御施設が必要な時代といえば、まず戦国時代が想起されるが、本遺跡では戦国期の遺物は全く出土していない。18世紀後半から19世紀の遺物が多いことから、SX3の構築は、江戸時代後期から明治初期に行われた可能性がある。

この時期の争乱といえば、1866（慶応2）年6月16日の第二次長州戦争・石州口戦が有名である。この戦いは地元にとっては衝撃的な事件で、戦後しばらくまで語り継がれていたらしい。石州口の戦いは、幕末に石見地方で起こった第二次長州戦争の戦闘の一つであるが、長州軍が幕府軍に勝利した緒戦の一つでもある。長州藩はこれを機に美濃郡を軍政下に置き、その後浜田城を落城させ、さらに松江藩を孤立させている。この戦いは長州藩が山陰道を制圧するうえで重要な戦闘だったといえる。

益田市街で勝利した長州軍は、急造の関門を死守していた浜田藩兵と対峙した。この関門が設置されたのが「釜出（鎌手）の三本松」である（矢富1966）。長州軍はおもに石州街道を使用して浜田方面に侵攻したと思われるが、浜田藩にとって主要街道だけでなく街道近隣の峠も備えが必要だったのかもしれない。国ヶ崎遺跡の石列SX3はこの時に構築された防壁の一つと考えることはできないだろうか。

石州口の戦いの前日、6月15日には長州軍は周防大島・上ノ関口の奪還に成功し、この報は浜田藩にも届いていたと思われる（松尾ほか2005）。とすれば、戦い前の浜田藩に緊張が走り、防御面に力を注いだことは想像できるだろう。このような状況は、鎌手の関門が物語っている。関連施設の記録や類例はないものの、峠を塞ぐ石列SX3がこの時の防衛を期待して作られた施設と考えることも、あながち荒唐無稽とは言い切れないようと思われる。

【参考文献】

- 岡山県教育委員会 1977『中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査10』
鳥根県 1967『新修鳥根県史 通史篇二』
鳥根県教育委員会 1992『重富遺跡』『中国横断自動車道広島松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IV』
鳥根県教育委員会 1997『歴史の道調査報告書 山陰道III』
鳥根県教育委員会 1997『池山池遺跡・原ノ前遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
西地区VII』
鳥根県教育委員会 2006『正源寺遺跡』『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
棚橋利光 1986『近世村落の村境と他界線』『村構造と他界線』雄山閣
橋口定志 2001『10区画・境界 区画と境界の施設』『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編 柏書房
出雲市教育委員会 2016『杉沢遺跡』『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』
松尾寿ほか 2005『県史32 鳥根県の歴史』山川出版社
矢富熊一郎 1966『石見鎌手郷土史』鳥根郷土史会

図版





1. 国ヶ峠遺跡遠景（北から）



2. 調査前近景（北東から）



1. 調査後近景（北から）



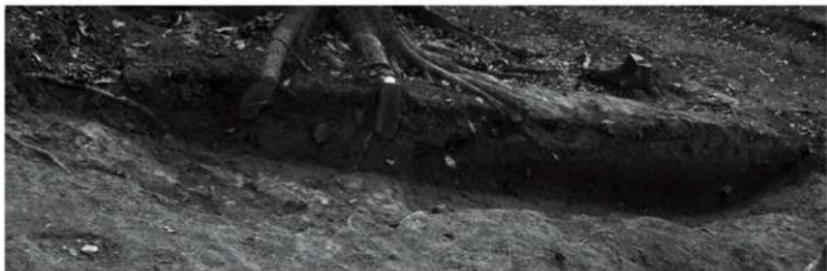
2. 調査後谷地形・道路遺構（南から）



1. 中央セクション（北から）



2. 南壁セクション（北から）



1. 中央セクション東端部分（北から）



2. 中央セクション中央部分（北から）



3. 中央セクション SX1 東側部分（北から）



4. 中央セクション石切り場部分（北から）



1. SX1 伐採後（東から）



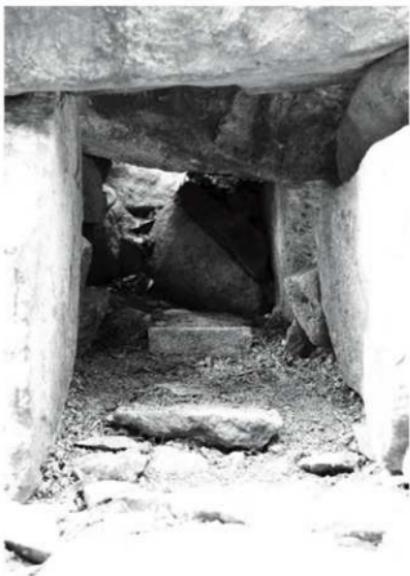
2. SX1 (東から)



1. SX1 天井石検出状況（南から）



2. SX1 右側壁（東から）



1. SX1 奥壁（東から）



2. SX1 床面東側（東から）



3. SX1 縦断セクション（東から）



4. SX1 地蔵台座（東から）



1. SX1 小碟・遺物検出状況（北から）



2. SX1 小碟検出状況（南東から）



3. SX1 小碟断面（東から）



4. SX1 小碟除去後（東から）



1. SX1 裏込め石 (南東から)



2. SX1 床面セクション (東から)



3. SX1 完掘状況 (西から)



1. SX2 検出状況（南西から）



2. SX2 基底部（南から）



1. SX2 東西セクション（北から）



2. SX2 南北セクション（西から）



3. SX2 完掘状況（西から）



1. SX4 検出状況（南東から）



2. SX4 セクション（南西から）



1. SX3 (東から)



2. SX3 (北から)



1. SX3 東端（南から）



2. SX3 東端（北から）



1. SF1 検出状況（西から）



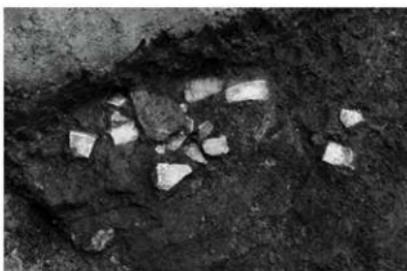
2. SF1 完掘状況（西から）



1. SF1 検出状況（南から）



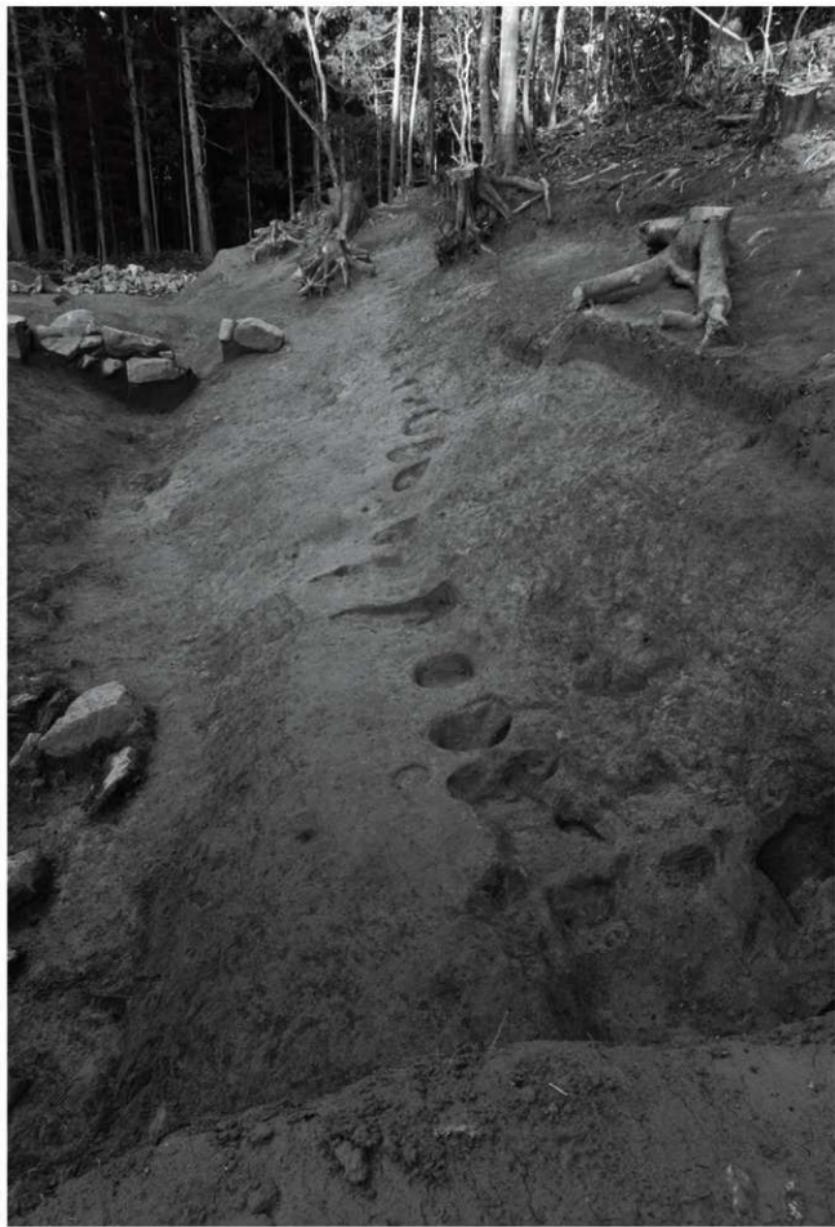
2. SF1 セクション（北西から）



3. SF1 旧表土第 21 図 2 出土状況（北から）



4. SF1 テラス（北西から）



SF1 完掘状況（西から）



1. SX5 (南から)



2. SX5 東端・SD2 東端 (東から)



1. SX5 第 24 図 A セクション（東から）



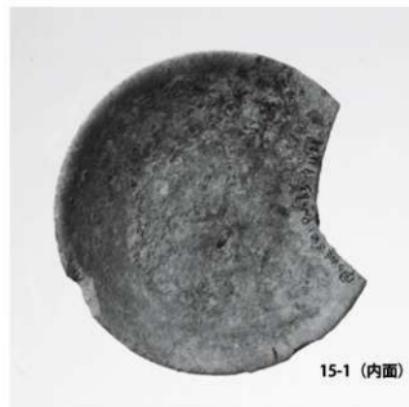
2. 石切り場（東から）



1. 石切り場切り出し跡（東から）



2. 石切り場切り出し跡工具痕（東から）



15-3 (表)



15-4 (表)



15-3 (裏)



15-4 (裏)

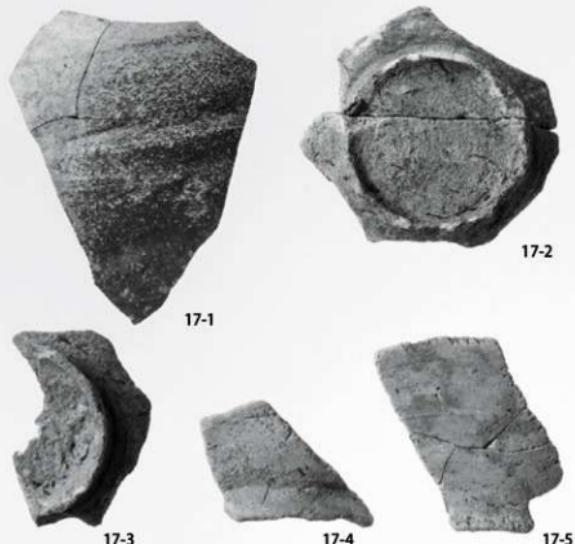


15-5 (上面)

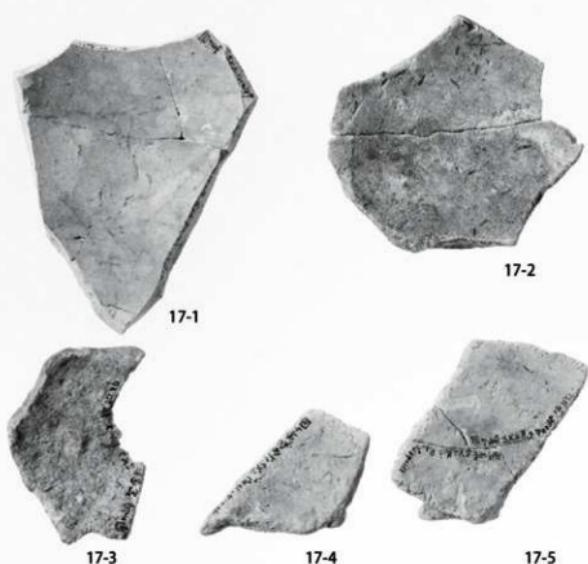


15-5 (下面)

SX1 出土遺物



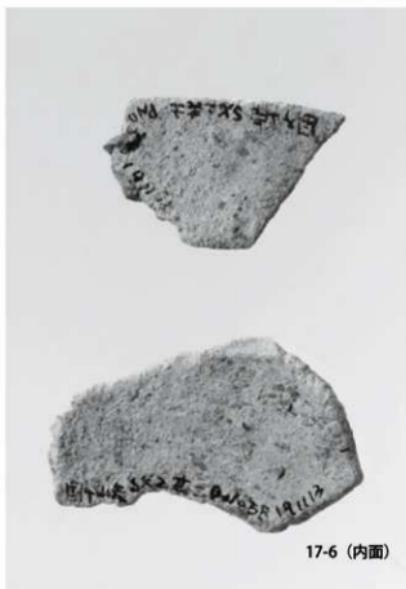
1. SX2 出土遗物（外面）



2. SX2 出土遗物（里面）

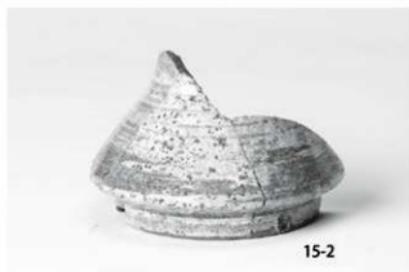


17-6 (外面)

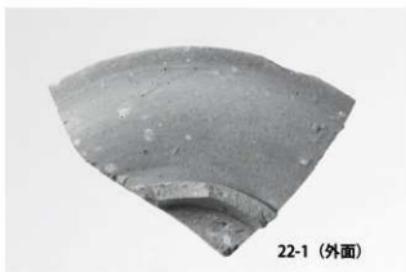


17-6 (内面)

1. SX2 出土遺物



15-2

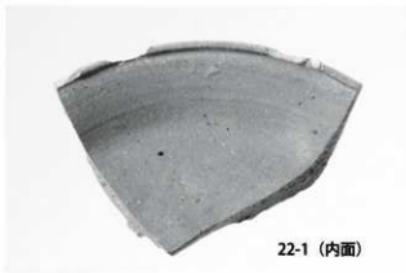


22-1 (外面)

2. SX1 出土遺物



19-1



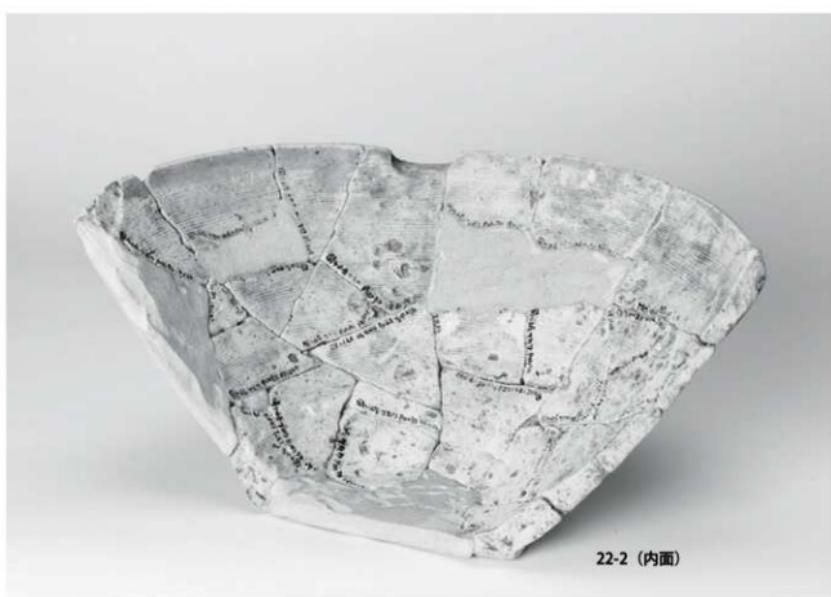
22-1 (内面)

3. SX4 出土遺物

4. 谷部旧表土出土遺物

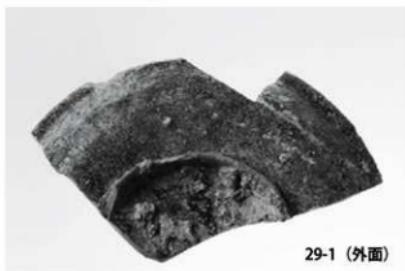


22-2 (外面)



22-2 (内面)

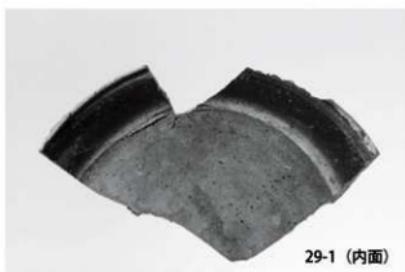
谷部旧表土出土遺物



29-1 (外面)



29-3 (外面)



29-1 (内面)



29-8



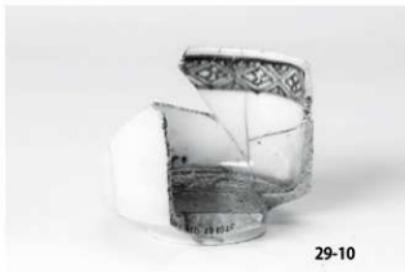
29-2 (侧面)



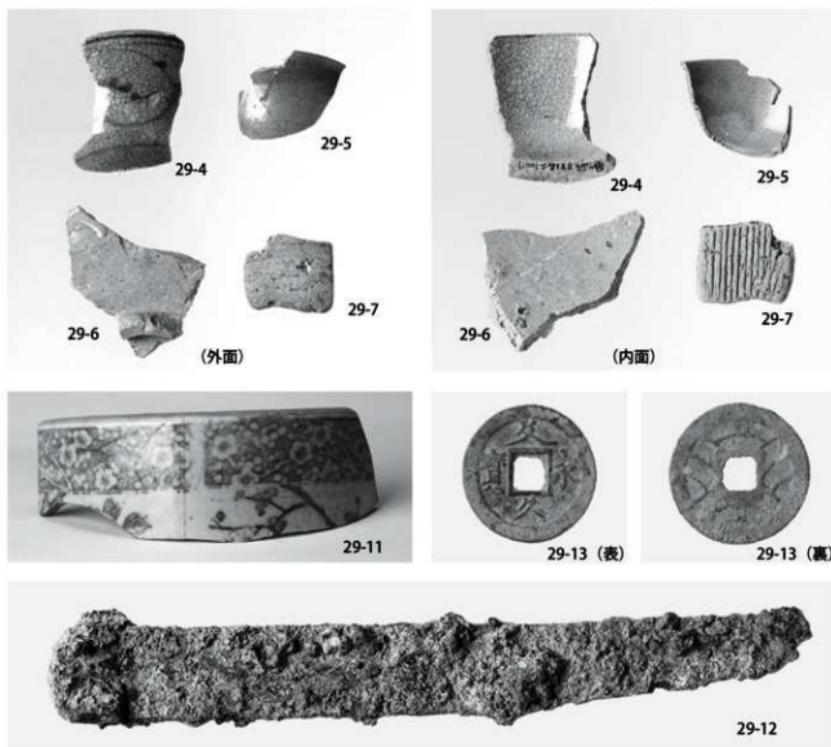
29-9



29-2 (底面)



29-10



1. 遗構外出土遺物



2. 出土金属製品 (X線写真)

報 告 書 抄 錄

フリガナ	クニガトトイセキ							
書名	国ヶ崎遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	4							
編著者名	東森 晋（編）・久保田一郎・柳浦俊一							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 烏根県松江市打出町33番地 TEL：0852-36-8608 FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
発行年月日	2020（令和2）年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こくがさき 国ヶ崎遺跡	しまねけんしますだし 島根県益田市 木部町・西平原町	32204	Q355	34° 44' 47"	131° 52' 42"	2019 1001 ～ 2019 1225	824	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国ヶ崎遺跡	祭祀遺跡 道路跡	奈良時代 中世 近世	道路遺構 石積遺構 石組遺構		陶磁器		中世初期の道路遺構、石積遺構、近世の石組遺構を確認	
国ヶ崎遺跡は益田市東部の西平原町、木部町の境界に位置し、両地区を結ぶ峠道が通る。現存する里道とは別の地点から、道路遺構に伴う連続土坑が検出された。時期は中世前期と推定される。 併せて、中世初期の石積遺構を検出した。地下施設を伴わないこと、峠に位置することなどの諸点から祭祀に伴う遺構の可能性がある。 近世には、道は現在の里道の位置に付け替わっており、この道に伴う石仏を安置した石組遺構を併せて調査している。								

印刷仕様

紙 質 表 紙 レザック四六判 175.0kg
本 文 上質紙A判 57.5kg
写真図版 上質コート紙A判 70.5kg
D T P Windows 10 Pro
Adobe InDesign CC Photoshop CC Illustrator CC
画像原稿 階調画像線数 175線(AMスクリーン)

国ヶ峠遺跡

一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

発 行 2020（令和2）年7月

発行者 島根県教育委員会

編 集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33番地

電話 0852-36-8608

印 刷 松栄印刷有限会社

